



リバーダンス-Riverdance-

作者：大臣

概要： 深夜に学校に忍び込んでピアノを弾く青年はある晩、その場所で銀髪の少女と出会う。その少女は異界からの来訪者、そして銀波の魔女と呼ばれ、黒衣の集団に追われる存在だった——。 微伝奇風味の、現代ファンタジー。不定期連載中。 現在、第0話まで公開中。

0. ノクターン第2番変ホ長調Op.9-2 #1

体育館までの道のりは大して苦ではない。道路沿いの柵をひょいと跳び越えて、敷地内に入ってさえしまえば別棟に分かれている体育館は容易に見つけることができる。校舎側から見て裏側へ回ればいつもぽっかりと口を開いている大穴が待っているため、するりと身を滑らせればそこはもうフローリングの床の上である。

軽く膝を払って立ち上がると、いつものことだがまず高い天井に圧倒される。授業中など電灯が煌々と輝いている状況ではそんなことは全く感じないが、暗闇に包まれたこの体育館の天井というのは、吸い込まれそうなほどに果てしなく高く感じられた。

これを初めて見たときはそれこそ卒倒しそうなものだったが、今ではもう何の障害もなく眺めることができる。この暗闇の先にあるのは実は天井などではなく地獄のような異世界か、はたまた満天の夜空なのか。今ではそんな哲学的な思いなど巡らせることができるほどに余裕すら感じていた。

そんな思いはさて置き、青年は土足のまますたすたと体育館を縦断する。ぎしりと何とも頼りのない音を立てる体育館はむしろ愛着すら感ぜられる場所。毎週数度は足を運んでしまう魅力の一つは、この古くささに親しみを覚えてしまうことにもあるのかもしれない。

備え付けの階段に足をかけて正面に据えられたステージへと上る。少しばかり高くなった視界は、この暗闇の中ではむしろそら寒い感触すら覚える。

何も存在しない空間。

ただ遠くの方で車が行き交う駆動音がたまに聞こえてくるだけ。

周囲には人家も主要道路もないこの敷地では、そんな静寂に満ちた空間というのは当たり前の光景である。日中も実に静かな環境であり、まさに学舎（まなびや）にはうってつけの場所だと言える立地条件である。授業中は教師の声が実によく響く。

その環境は当然の事ながら学舎としてだけではなく、演奏するのにもまさにうってつけの場所と言える。周囲の雑音が迷い込むことすら容易ではないこの場所において、針の落ちる音さえ聞こえてきそうな音響は、まさに音楽系の部活動を促進させる要因の一つになっていると言える。

青年は備え付けのグランドピアノを真っ直ぐに見据えるとそれに向かってゆっくりと近づく。ピアノの上に覆い被さっている夜色のカバーをはぎ取ると、その下からは漆黒の筐体が顔を出す。

体育館を包む宵闇よりも暗い色に塗られた黒。その色はいつ見ても吸い込まれそうなほどに美しい。誰かの指紋がいくつか残っているが、その多くは恐らく自分のものだろうと言うことを青年は知っていた。そもそもこのピアノはほとんど使われることがないのだ。

体育館にあるピアノなど邪魔なだけ。実際使われるのは入学式や卒業式、あるいは文化祭といった行事くらいなもので、フットサルやバスケットボールを行うときなどはいちいちステージの緞帳を閉めなければならない。そういった事情もあり今では完全に邪魔者扱いされている。存在自体がもはや忌み嫌われているのである。

音楽室へ移動せよという声もあるが、音楽室には音楽室で専用のグランドピアノが用意されているためそういう訳にもいかず、結局いまだにこの場所に留まっているという話である。

あるいは、見捨てられたのだ。卒業式ではピアノなど演奏せずにテープを流してしまうような風潮もあり、もはやこの剰余のピアノはお払い箱でしかない。既にもう一年以上調律されていないという事実からも明らかだろう。

ぼんやりとそのピアノを見つめる。少しばかり眠そうな眼（まなこ）で、三十秒ほどそうやって見つめていた。無音の世界で浮かんでは消える旋律を確かめながら、しばらくして、ようやく思い出したかのようにポケットからくすんだ銀色の鍵を取り出した。

手探りで鍵穴を探し、差し込んで捻る。かちりという、小さいがよく反響する音が体育館を一瞬包み込みそして消えていった。

次いで手際よく天板を開き、椅子を軽快に引き寄せて鍵盤の蓋を開ける。大抵の奏者はピアノを弾く前に椅子の高さを調整するが、このピアノに備え付けられた椅子に関しては青年の他に利用者が居ないため、毎度毎度調整する必要はない。前回使用されたのも二日前の深夜に青年が用いたのが最後だろう。

ひとつ大きく深呼吸。体育館に満ちた静寂を味わうかのようにゆっくりと吸い込み、勿体なさそうに吐く。気を沈めるためでも気合を入れるためでもなく、まるで儀式の始まりを告げるかのように厳かだった。

ゆっくりと右手を差し出し、そして白鍵の上へと垂直に下ろす。ハンマーが緊張した弦を

叩き、すこしチューニングのずれた高音が体育館の入り口の方へ向かって飛んでいった。

その感覚を確かめるかのようにゆっくりと隣の鍵盤に触れる。チューニングのずれた、先ほどよりも少し低い音が再び体育館を駆けめぐる。その調子でゆっくりと、だが徐々にスピードを上げてピアノは発声練習を始めた。

右手が丁度青年の正面のあたりへ来るとゆっくりと右手を離し、今度は先ほどとは反対側の鍵盤の上に左手を構える。そして同じように、右手の時とは左右対称の動きをしながら鍵盤の上を指が滑っていった。こちらは低音から高音へと上っていく音階。音は空間を駆け抜けるというよりは、空間にどろどろと留まっているという印象のほうが強い。

左手が正面まで戻ってくる。中央のドの音を最後に、青年は一旦椅子に座り直して姿勢を正した。右足はペダルの位置に置き、両手はゆっくりと鍵盤の上に構えられる。

一瞬の静止。

ダンパーがゆっくりと降りて弦に触れ、ピアノの声も途切れる。

体育館の中にはまだほのかに残響が響き渡っていた。窓ガラスが微細に振動し、隙間から入り込む冷気は誰の耳にも認知できない共振を起こす。

外気から押し寄せた静寂が再び体育館に満ち始めようとしたそのとき、ピアノは第一声を発した。

右手から紡がれる音は流水のように体育館の外へと流れていき、左手はその水が溢れ出ないように優しく縁をなぞっていく。一定のリズムで刻まれるペダルは、こんこんと湧き出る音の形を常に調整し、保っていた。つい数分前までは静寂という名の暗闇に呑まれていたこの空間は、今や優しくも切ない鍵盤の音色に充ち満ちていた。

音は体育館の外、校舎から校門までよく通る音で響いている。ピアノはそれほど大きな声で歌っている訳でもチューニングが正しい訳でもない。その微妙に歪んだ音階から生み出される旋律はむしろ、背筋がぞっとするほど気持ちの悪い不協和音を奏でることもありえるというのにも関わらず、その優しい旋律に不快を感じさせるような因子は何もなかった。

流れるような旋律、転がるように鍵盤を滑る指先。何気ないその演奏は、だが何処までも透き通った音を校内に響かせていた。

夜の学校に観客など居ない。全ての教室は灯が落ち、職員室や用務員室にも残っている者など居るはずもない。夜も深まり、あとは明けていくだけの時間においてピアノの旋律だけが輝いてるかの如く鳴り響いていた。

演奏が途切れることはなかった。湧き出る音は穏やかな流れから激しさへと変わり再び穏やかなものへ、と繰り返される。流れる旋律は波のように、耐えず押し寄せながらも同じ形をした旋律は二度と表われない。

誰に聴かせているでもない、ただそうあるのがごく自然であるかのように、月夜の即興演奏会は続いていく。一年間ただ無為に弾き続けた夜想曲は、青年にとって日常であり、何の変哲もない一日の一コマだった。

演奏を始めてから三十分が経過した。

闇に覆われた視界の端で何かが動いたような気がして視線だけをその方向へ向けた。青年の意識は鍵盤からその何も居るはずのない空間へと移り、それに合わせて心持ち演奏はトーンダウンした。

見つめた先にあるのは校舎と体育館を繋ぐ渡り廊下に面した扉。小さな窓ガラスが嵌められているが暗闇の中ではそんなものも意味はなく、目でその変化を捉えることは出来なかった。扉はしっかりと閉まっているし、そもそも夜は施錠がされていて正面切ってこの体育館へ入ることは不可能なのだ。そこに何かが居るとしても、たまに見かけるネズミやネコといった類だろう。

そう思いながらしばらく見つめていたが特に変化は起きなかった。緩やかになったピアノの音色がただ反響しているだけ。ネズミもネコもおらず、やはり幻覚だったかと思い直して意識をピアノの方へと戻すことにした。そもそも小動物が動いたとしても、ステージの上に備え付けられたピアノの前からでは距離が空いているため目視することは困難だろう。この古い校舎においてそんなことは大して珍しくもないことだった。

ピアノの演奏が激しくなろうとした瞬間、青年の目は再び同じ方向に異変を捉えた。今度は見間違はずもなく、扉に嵌った窓の外で青白い光が一瞬だけ明滅したのを感じ取った。

——誰か居る。

そう感じると同時に鍵がかかっているはずの扉ががらりと開いた。もはや幻覚ではなく、それは誰が見ても間違いなく「開いた」のである。

そして、人型の影が扉の内側へと転がり込んできた。

身を滑らせるように音も立てず忍び込むと重い扉を手早く閉める。完全に閉め切った途端、その扉の合わせ目が一瞬だけ青白く輝いた。その光の色は、青年が先ほど見た色と似ているように思えた。

この間にも、ピアノは激しい旋律を歌い続けていた。青年の目は侵入者の影に釘付けとなっていたが、指先と右足は別の生き物であるかのように音を紡ぎ続けている。まるで、その不可思議な事象のBGMであるかの如く。

宵闇の中、その影が何者であるかは十分に見分けることが出来ない。今判別できるのは、それがおぼつかない足取りでステージへと近づいてきているということだけ。影は足取りこそ頼りないとはいえ緊張した雰囲気はなく、演奏中一人で立っているのも気まずいからどこかに腰を下ろしたいのだが椅子が見つからないからどうしようといった、そんな人間味のある仕草であるように感ぜられた。

演奏は未だ続いていた。身体は自然と波のような音楽を生み続けているが、正直なところ青年はその影の存在に興味が向いていた。ステージの上からではどんな人物なのか判然としなないが、それが例え警備会社の人間であれ、すぐに声をかけず、まるでピアノを聴きに来たかのように振る舞っているというそのことが妙に可笑しかった。ついでにあの青白い光についても知っているかもしれない。

ふと演奏のテンポを落とし、演奏を締めようとゆっくりとした旋律に切り替える。元々即興で弾いているために演奏を終えることなどいつでも出来た。毎回、ここに来るとふっと浮かんでは消える旋律をただ漠然と引き続けていただけなのだから。

だが、演奏をクライマックスへと向かわせていると、影が小さく動いてそれを制止した。といっても影はステージの下から手のひらを左右に振って、否定するような動作をしているというだけ。その動作はどことなく、演奏を終えてしまうのを拒んでいるように感じられた。

本当に演奏を聴くためだけにここへ侵入してきたのだろうか、半ば信じがたかったがその影の要望ともあり、もう少しだけ演奏を続けることにした。この即興演奏会の演奏時間は集中力の関係上、多少の誤差はあれど大抵一時間程度。まだ三十分程度しか経過してないのだから、残りの時間をいつもどおり弾き切ってしまうおうと、青年は再び演奏をループさせ、そしてなだらかに次のシーンへと繋いでいった。

影はステージ脇の階段へ腰を下ろすと、聞き入っているのかそのまま動かなくなる。

グランドピアノの澄んだ歌声に包まれた宵闇の中、月光が照らし出した影の輪郭は、柔らかな少女の笑みを象っていた。

0. ノクターン第2番変ホ長調Op.9-2 #2

ばすばすと乾いた手のひらを打つ音がする。

何度も転調を繰り返して曲調も幾度となく変化し続け、そしてゆったりとした流れに乗ったまま演奏を締めくくると、先ほどまではびくりとも動かなかった少女はそうやって拍手を贈った。青年が夜中の演奏で拍手を貰ったのは初めてのことだった。

少女はスカートの裾を払いながら立ち上がると、ゆっくりとピアノの前へと歩み寄ってきた。見たところ青年と同じくらいの年であろう。肩のところで乱雑に切り揃えた髪、表情や小さな仕草はどう見てもごく普通の高校生といった感じである。

「ありがと、いい演奏だった」

その不思議な侵入者の第一声。耳に馴染みやすいアルトの声だった。

「聴いたことのない曲だけど、凄く懐かしい感じ。これ、何ていう曲？」

少女は鍵盤の真横に立つ。そこまで来れば慣れた目ははっきりと少女の形を捉えることができた。

身長は青年よりも少し低め、色白な肌と華奢な身体は珍しい銀色の髪と相俟って、どこことなく幻想的で浮世離れしたような印象を覚えた。俗に言うお嬢様、という雰囲気ではないが青年はあまり接触したことのないタイプだった。

「即興だよ。思い浮かんだメロディを適当に弾いてるってだけ。気に入ったか？」

「ちょっと雑っぽくて荒削りって感じはするけど、概ね雰囲気は気に入ったわよ。六十五点ってとこかな。あんまり他で聴いたことのないような曲風ね」

初対面に対してさらりと厳しい評価をしてくる様子に少しむっとしつつ、初めてそういう突っ込みを貰ったことに青年は少し嬉しかった。少女が笑っているからなのか、青年も思わず笑みを浮かべていた。

「身体が自然と弾いてるんだ。曲風とかそういうのは意識したことがないな。……まあ、あんたが気に入ったならそれでいいよ」

青年は鍵盤の蓋を閉めると手早く鍵盤をかける。かちりという小さな施錠音が妙に可愛く体育館内にこだました。

「しかし、いきなり現れて結構な酷評だなあんた。こんな夜の学校で一体何やってたんだ？制服も着てないところを見ると、ずっと学校に居たって訳じゃなさそうだけど」

続いて天板を丁寧に閉め、最後に暗幕のようなカバーを上からかけて退出準備完了。ピアノは自分のものでないと準備と片付けが楽に済むので、青年もお忍びでやるには丁度良かった。

少女はその何でもない一連の作業を興味深そうに眺めていた。

「そういうあんたもお互い様でしょ。なんで学校に忍び込んでまでピアノなんか弾いてる訳？」

随分と手際がいいところを見ると今日が初めてって訳じゃなさそうだし」

「ん、そうだな……強いて言えば、趣味かな」

「趣味？ 夜の学校に忍び込んで体育館のピアノを弾くことが趣味？」

「ああ」

これは本当のことだった。一年半ほど前から始めたこの習慣は暇潰しに丁度良く、いつの間にか週に二、三回も通うようになっていた。それを趣味と呼ぶのは、たぶん間違っていない。

弾き始めた理由はよく覚えていなかった。ピアノの練習でないことは確かだが、ストレス発散のためなのかスリルを味わいたいからなのか定かではない。ただこうやってピアノを弾いていて不快を感じたことはないし、特に疑問も湧かなかったのもそのまま続けて今に至るのである。

「……さてはあんた、学校で浮いてる方でしょ。一人でなんか人生悟っちゃったような顔して、学校には行ってるけど授業は全然聞いてないって感じ。どう？」

またもざっくりと切り込んでくる様子に、青年は思わず苦笑してしまう。彼女の言うことは正しく、ここまで青年に食い付いてくるような友人はそう多くない。なのでその言葉が妙に可笑しくて思わず笑ってしまった。

「まあ、そんなところだよ」

少女もくすりと笑む。

「やっぱり。そうやってすましたような表情してるやつって、大抵そんな感じなのよねえ」

「悪かったな、この顔は生まれつきなんだよ」

「生まれたときからってことは、学校での浮きっぷりも筋金入りってわけね」

「あーもう訂正するのも面倒だからそう思っててくれ……」

不思議な感覚だった。ついさっき出会った人間の前でこうやって笑っているというのは、青

年にとってごく稀なことである。青年が砕けた言葉遣いを用いているのはただ人付き合いが不器用だというだけの話で、実際のところこうやって話せる人間など他に数える程度しか居ない。それなのにどうしてか、この少女とは気兼ねなく話すことが出来た。

だからなのか、余計に興味湧いてしまったのも事実である。

「それで、もう一度訊くけど」

「うん？」

「うちの学校に、何しに来たの？」

少しだけ語気を変えてみると、少女の表情は一瞬ぴくりと硬直した。

「さっきの言葉からどうにも、この学校の生徒って感じの台詞じゃないんだよな、あんた。そもそも学生かどうかも怪しい言い回しだし」

少女が視線をそらしたところを見ると、どうやらピンゴだったようだ。自分の通う校舎に居ながら「学校に行く」と言うのは、少なくともこの学校の生徒じゃないという言い回しである。

そのことに自分でも気付いたのか、少女は少しばかり慌てた様子になる。

「えっと、忘れ物を取りに来たって言ってもダメ？」

「そもそもこんな時間に学校に来る生徒なんて居ないって。最終下校時刻の七時を過ぎたら校門から昇降口まで全て施錠されるんだし」

「じゃあ実は警備員でしたー、とか」

「じゃあって何だよ、じゃあって。それにそんなに若くて制服も着てないやつが警備員な訳ないだろ」

「もしかしたら居るかもしれないじゃない？」

「あんたがそう断言出来ない時点で居ないってことじゃないか……」

赤の他人ながらあまりの無策っぷりに呆れて、青年は盛大にため息をつく。何をしにここへやってきたかは知らないが、どうにもお間抜けな侵入者のようだった。

「はあ、もうちょっとまともに対策練っておけよな……本物の警備員に見つかったらどうするつもりだったんだよ。俺は顔が利くけど、あんたはそうもいかないだろ」

「それはまあ、色々と」

もの凄く気になる表現だったが、これ以上訊いても真っ当な答えが返ってくるとは思えなかったので止めた。

備え付けられた時計を見やると既に一時を回っている。この時間になればもう警察や警備員も巡回を終えているということは、青年の経験上確実である。したがってこのままここで少女と話し込んで大して問題はないということだ。

青年はピアノの椅子に腰を下ろすと少女を見つめる。少女はというとさほど気にした風もなく、ピアノにもたれかかってだだっ広い体育館の空間を興味深そうに眺めていた。

宵闇に包まれた体育館というのは昼間のそれに比べてより広く、より荘厳に見える。静寂という名のベールも降りれば一層神秘的な様相を呈する。月光に照らされてただの黒ではなく、藍や紺といった色に塗りたくられ、そんな中で初対面の人間が二人ぼんやりと並んでいるというのはとてつもなく不思議な感覚がした。

「猫」

ぼつりと、小さな声がピアノの脇から聞こえてきた。視線は天井に向いたまま。

「猫を探してたんだ」

「あんたのか」

少女はふるふると首を振る。

「でも、私の責任だから」

それだけ言うと小さなかけ声と共に上体を起こす。

瞳の輝きは先ほどまでとは色が変わり、幼さの残るおどけたものではなく、遙か遠くを臨むような眼差しだった。その目が何を見ているのか、青年には判らなかった。

暫くそうしていたあと、背中に手を当ててぐぐっと伸びをすると、準備運動なのか整理運動なのか判らないがぐいぐいと上半身を捻ったり横に曲げたりし出した。とんとんと軽く跳ねてみたり、腕を回してみたり。

青年はそんな様子をぼんやりと眺めていたが、やがて同じようなかけ声と共に立ち上がった。

このままここに居てもいいのだろうが、これから何かをすべき人間の邪魔をしてはいけないという、半ば義務感めいたものを感じて立ち去ろうと決めこんだ。少女とはもう少し話をしていたい気もしたが、今の話を聞いた以上、あまり長居をして邪魔をするのも気が引けた。

探すのを協力する、という考えは浮かばなかった。少女の何か思い詰めたような表情が、あ

まりそのことには触れずにいた方がいいという印象を感じさせたのだろう。取り敢えず、そういうことにしておいた。

「何処行くの？」

背中に小さく声が投げかけられる。

「帰るよ。明日も授業あるし」

「そっか。それじゃ仕方ないわね」

授業などどうでも良かったが、しかし実際授業には出るので嘘は言っていない。

本人が気付いているかどうかは判らないが、少女の声音が心持ちトーンダウンしているように感じられた。たった今出会ったばかりの縁とは言え、名残惜しいのはお互い様ということなのだろう。青年も後ろ髪を引かれる思いがないと言ったら、それは嘘になる。

しかし長く居れば居るほど、それこそ余計に気を使ってしまうというものだろう。青年もここが引き際だと感じていた。

「あんたはまだ猫を探すのか」

「うん、もう少しだけ」

「そっか。気を付けろよ、ここら辺静かな分だけ物騒だからな」

——他人を心配するなんて、らしくない。

自然と出た言葉なだけに、青年はそう思わずひとりごちた。

「誰にもものを言ってるのよ。私がそう簡単に襲われると思うわけ？」

心配して損したといったところか。拳を握って笑顔でそう返すので青年も思わず微笑む。会ったばかりの相手の実力など知るわけもないが、これだけ無鉄砲で勝ち気な性格ならあながち、とも思えた。

「はいはいそうですか。じゃあ、またな」

青年はそう適当に返してステージを飛び降りると、体育館の裏手へ足を向ける。振り返ると少女は小さく手を挙げていた。青年も、振り向かず軽く手を挙げてそれに応える。

何気なく出た言葉だったが、それには僅かな確信があった。この少女にはまた会えるだろう、と。

だから青年にとって、名乗り忘れたことも名前を聞き忘れたことも些細な問題だった。そもそも人の名前というものに無頓着な性質（たち）であるということもあったが、また会った機会にでも訊けばよいだろうと、そんなことをぼんやりと考えていた。

入学当時から開いていた穴を気怠そうに抜けると微風が頬に冷たくあたる。

いつも通りにただ思うがまま一通り演奏して何事もなく終わるはずだった即興曲（ノクターン）は、何故か普段よりも柔らかい色を孕んでいたような気がした。

こちらに来てから何度かそういった人間には出会ってきていた。

それは町中ですれ違う程度だったり、引き寄せられるように偶然訪れた場所で出会った人間だったり。

勿論それはこちらに来る以前と変わらないので大して驚くべきことではない。むしろそういった出会いにこそ自覚のない逸材が眠っていることが多い。だからこの状況は何の不思議もない、ごく自然な状況である。

「でもあれは……尋常じゃないわね」

ピアノに預けた背を離すと、服に付いた埃をさっと払う。

いつの間にかはぐれていて、何故か連絡の取れない尋ね人を追ってここに辿り着いたというだけであり、今でも彼女を捜さねばならないことに変わりはない。そもそもこうやって音信不通になることなどこちらに来てからは一度も無かったことであるし、そのことについて嫌な心当たりがしていた。そう考えれば、まずはこちらの件を片付けてしまうのが先決ではあるのだが。

よ、と小さなかけ声と共にステージを降り大きく息を吸って耳を澄ませ、この建築物から敷地外まで周囲の状況を探る。幸いにも音が良く通る環境なので微細な状況まで感知できる。

さわりと揺れる木々の声、車道を過ぎ去る一台の車、気怠そうに遠ざかっていく青年の足音。

一時間前まで感じていた複数の気配は、消え去っていた。

そのことに安堵して一つ息を吐くと、首を捻ってこきこきと骨を鳴らす。

「あいつには悪いけれど、ひとまず今はここを根城にするのが無難、かな」

少し曇った表情をすると、少女は元来た道を引き返す。彼らが居なくなったとは言えこの場所に長居するのは得策とは言えない。演奏が終わった今、少しでも早く立ち去る必要があった

。

体育館の扉の前に立つと、鍵のかかったそれにそっと手を触れた。目を閉じて息を小さく吐くとその指先が一瞬だけ青白く輝き、すぐにまた元の暗闇へと戻る。

扉に手をかけてそっと戸を開くと、少女は銀色の髪をなびかせながら宵闇の中へと疾駆していった。

美しい夜桜の舞い散る合間で、うっすらと雲のかかったおぼろ月が昇っていく。

0. ノクターン第2番変ホ長調Op.9-2 #3

二日続けて足を運ぶなどと言うことは滅多にしない。

もともと気が向くままに弾いているだけの演奏会であり、聴衆も居るわけではないので特に義務感を感じたりしていたわけでもなく、そういった理由からなんとなく二日続けて行くようなことはあまりしてこなかった。

だが昨晚の出来事——といっても見知らぬ少女と出会ったというだけの話だが、それはただ何気なく弾いてきた真夜中の演奏会に新しい意味をもたらした、青年はそんな気さえした。

勿論、ただ漠然とだが。

それがどんな変化だとかいったことはあまり考えたりはせず、と言うよりはさほど興味も湧かなかったので、今はただ取り敢えず昨晚の少女にまた出会えるような気がして、こうして体育館へと足を運んでいた。

「遅い」

フローリングの床に身体を滑らすなり、唐突にステージの上から声をかけられた。真夜中の体育館は相変わらず深い闇に包まれているが、今日は今までよりもそう奥行きを感じなかった。

「もう少し待って来なかったら帰るところだったわよ。まったく、なんでこんな深夜に来るのよあんた。もっと学生なら学生らしく健全な生活送りなさいよね」

「……あんたに言われたくない」

暗闇に紛れて相手の姿は見えないが声の口調から察するに、明らかに昨晚の少女であると判る。それは判るがいきなりそう言われる理由は判らなかった。

青年は脱力したようにひとつため息をつく、頭の後ろを掻きながらゆっくりとステージへ歩み寄る。

「ていうか、あんたもその健全な生活とやらを送ってない人間の一人じゃないか」

「うちの猫はこの時間が活動時間なのよ。ほんと、探す方の身にもなって欲しいわよねー」

青年はステージ脇に備え付けられた階段を一段一段ゆっくり上る。ピアノへと近づく毎に少女の姿が徐々に明瞭になっていく。

ステージに腰をかけ、他ではあまり見ない銀色の髪を指でくるくると弄びながら足をぶらつかせている。猫を探すのに四苦八苦しているかと思ったが、思ったよりも随分と呑気な風体だった。

「その猫探しをせずにここに居たってことは、もしかして俺を待ってた？」

ピアノのカバーを外し、丁寧にたたみながらそう聞くが、

「あんたの演奏、割と気に入ったから」

特に気にした風もなく、少女はそう答えた。

「……そりゃどうも」

ポケットから鍵を取り出して穴へと差し込む。くるりと回して蓋を開け、天板を半分ほど持ち上げる。昨晚と同じ手順、動作で準備を進め、全く位置と高さの変わっていない椅子に座り、一つ息を吐く。

ふと体育館内部を見渡すとそこには黒い幕があった。それはいつもと変わらない、どこにでも黒。吸い込まれそうな恐怖に怯えたことが何度もあったそれは、だが今日は違った色を孕んでいた。

ステージの端で腰を下ろし、口に手を当てて欠伸を噛み殺している少女。

プールの中に落とした角砂糖のようなそんな微細な変化であったけど、確かに何か違った感覚を覚えた。どこまでも吸い込まれそうだった同じ風景が、いつもよりも親近感を覚えるというか、ただ広いと感じていた空間に何か新たな要素が満ちているような——

「何？ 私が気になる？」

退屈そうにしていた少女は青年の方を振り返ると、演奏が始まらないことを不思議に思ったのかそう呟いた。他意はなく、純粋な眼差しだった。

「いやそういうわけじゃ」

「じゃあなんでこっちをじろじろと見てるのよ」

柄にもなく思案を巡らせているうちにいつの間にか少女の方を見つめていたことに気付く。

思い出したかのように視線を泳がせると、ぱつが悪そうに頭の後ろを掻いて、

「あー、いや、別になんでもないから」

「ふーん、まあいいけど」

少女はそれきり、また足をぶらつかせて退屈そうな格好をする。視線はどこか遠くの方を見つめながら、じっと演奏が始まるのを待っていた。

青年は静かに指を構え、右手から左手へと順番に運指の訓練をする。昨晚と似ているが微妙に異なる音階で流れるように指を踊らせると、黒い筐体もそれに合わせて指のダンスのBGMを奏でる。ウォームアップとは言え音楽を何も知らない人間が聞けば、それは曲として十分に認識させられる一つの音楽だった。

本演奏へ入る前に、ちらりと少女を見る。

妙な客、だと思ふ。昨晚出会ったばかりだというのに、まるで車のボンネットの上に新しい寝床を見つけた猫のようにこの空間に居着いている。それもなんの悪びれもなく。

いつも一人であった空間に二人の人間が居る。学校入学直後やクラス替え直後の状況などを鑑みれば、普通に考えればそれだけで気まづくなったりするのが常であるはずなのに、どうしてだか、その状況を素直に受け入れている自分が居た。高校に進学した頃や吹奏楽部などに入ってみた当時は、クラスメイトや先輩たちとどんな会話をすればよいのか思案し沈黙になることも多々あった。そんな状況では良い気分にはなれるわけもなく。

しかし、この状態はどこかその状況に似通いつつも違った状態だった。青年が今まで出会ってきた人間の中でもここまであっさり打ち解けてしまう——と言ってもまだ打ち解けたといえるかどうかは甚だ疑問だが——人物が今までに居ただろうか。

……つまるところ自分も特異な性格の持ち主なんだろうかなどと考えた後、まあそんなことはどうでもいいかと思いを切り替え、青年はゆっくりと白鍵の上に指を下ろした。

鍵盤は跳ね、指は舞い、弦は歌う。

普段よりも心持ち長調の和音が多いな、などと感じながら深夜のミニコンサートは開演した。

一時間よりも少し長い時間が経ち、演奏が終わる。たった一人分の拍手のあと少女は例によって昨晚と同じく、迫りに欠けるだの変化に乏しいだのと言った割合厳しい評価をして「七十点」と言った。

青年はピアノの蓋を閉じて鍵をかけると、そのままピアノの筐体に身体を預ける。普段から夜更かしなどするようなことのない青年にとって、真夜中に二日続けて忍び込んで即興曲を弾くということは割合過酷な労働である。有無を言わず眠気が襲ってくるのも当たり前と言えば当たり前だった。

やらなければよかった、などと思っても既に後の祭。

「だらしないわねー。若者ならもっとシャキッとしなさいよ」

少女は先ほどと変わらず足をぶらぶらとさせながら、背はステージの上に預けて横になっている。

「二日連続って、正直厳しいんだけど」

「あーもう、最近の若者はどうしてこう体力がないわけ？ 私が学生時代は昼だろうと夜だろうと、それはもう寝る間も惜しんでそこら中駆けずり回ったものよ」

「いや、昼に駆けずり回るって、それ授業サボってるじゃん」

「授業なんて、あんなの理解していれば出る必要ないのよ。ちゃんと試験で満点とれば教師もそれ以上文句は言えないでしょ」

「そりゃそうだけど」

普段大して勉強もしていないにも関わらず悪くはない成績をとることから、青年は周囲の人間からそのことを羨ましがられたりすることがある。そのため少女の言っていることが理解できないでもなかったが、学校で実際に高成績を修めているような人間の中にこういった考えを持っている者を見たことはなかった。大抵の者は勉強をして良い成績を収めることに誇りを持ったりするものだと思っていたので、それに執着しないというのは変わった人間だなという印象を覚えた。

そんな性格よりも気になったのは、

「というか、あんた年いくつだよ」

少女の口走った「学生時代は」という下りから学生でないということは明らかだが、しかし外見はどう見ても学生。改めて眺めてみても、珍しい銀色の髪を覗けば仕草や服装まで至って普通の高校生といった雰囲気である。現役の学生だと言われた方がむしろしっくりくる。

少女——もしかすると少女と形容するのも正しくないかもしれない——は上体を起こして小さくため息を吐く。

「あんた、女性に対していきなり年齢を訊くだなんて作法がなってないわねー。物事には順序ってものがあるんだから、そこら辺をきちんと弁えないと痛い目見ることになるわよ？ 私だ

からよかったものの」

「それをあんたが言うか」

昨晚から、演奏に対していきなりの酷評をぶつけてきたり、生まれつき性格に問題があるだのなんだのと言ってきた本人がそんなことを言っても、説得力などまるでない。

「まあ、別にいいけどね……」

小さく溜息を吐いてうなだれる。

既に学生でないということは当然の如く年上なんじゃないだろうかと思い、そんな相手に馴れ馴れしく口をきいている自分もどうなんだと考えるが、ここまで来て今更敬語を使うのもなんだが気が引けたので青年は考えるのを止めた。そもそも教師にだって敬語を使わないことがある青年にとっては今更である。

そうやってぼんやりとしながら天窓の外のを眺めていると、ふと少女の視線に気付く。後ろへ両手をつけて上体を支えた状態でじっと青年のことを見つめていた。

髪の色とは違って瞳の色は日本人のそれと大差なく、よく見れば顔立ちもアジア系、というより普通に日本人と何ら変わりがない。だがその独特の髪の色や雰囲気からどことなく日本人離れした印象を受ける。口から発せられているのは流暢な日本語だというのにも関わらず。

「何？」

青年の側から見つめ返しても、少女は一向に視線を外さなかった。青年が問うと目を細めて顔を引いた。

「いやー、あんたって変なやつだなあとって」

「本人に直接言うかそれ」

「あはは、悪い意味じゃないわよ。いい意味でもないけど」

最後の一言は余計だ、と思いつつ、そのまま漆黒の筐体に身体を預けた状態で青年は視線だけ少女の方へと向ける。

一呼吸置いて少女は続けた。

「今まで色々な人間に会ってきたけど、あんたみたいな人間には会ったことないわね。私がこれまで会ってきた人間はもっとこう、私の年齢とか容姿とかに踏み込んで訊いてくるものだけど、あんたはそうじゃないのよね……よく言えば寛容、悪く言えば脳天気というか」

「……訊いて欲しいのか？」

青年が何気なくそう呟くと、少女は少し顔をしかめる。

「別に、そういう意味じゃないけど」

「それじゃ、そんなこと気にする必要ないだろ。俺も理由なんてないし、特に知りたいとか思わないだけだし」

少女は表情のない、と言うよりはどのような顔をすればいいのか判らないといった表情。ぽかんとしてそのまま五秒ほど見つめ合ったあと、

「……やっぱあんた変わってるわよ」

それだけ言ってステージから飛び降りた。

軽い着地音と床が軋む音が体育館に反響し、少女はくるりとステージ上を見つめる。

「ねえ、あんたって毎晩こうやって弾きに來てるの？」

少し離れた暗闇の中からアルトの声が聞こえる。青年はそれを見下ろすような位置関係になったが相変わらずピアノに上体を預けたままの格好で、眠気の所為なのか疲れの所為なのか、姿勢を変えるような気にはなれなかった。

「気が向いた日に來て、適当に弾いてるってだけだけど」

「ふーん。それじゃあんたが弾きに來る日は、私も毎回聴きに來ようかな」

その言葉に別段驚くこともなく、青年はただ少女の目をぼんやりと眺めていた。

「別にいいけど。……そんなことより、猫はいいのかよ」

「勿論探すわよ。当たり前じゃない」

「そうじゃなくて、いつもこんなところに来たら猫探すのも全然はかどらないんじゃないのかよ」

そう言うと、少女は特に気にした風もなくふっと笑う。

「まあ、なんとかなるわよ」

昨晚の割合真剣な眼差しはそれなりに思い詰めているような雰囲気だと感じたのだが、それを思わせないくらい軽い口調でそう言い放つ。あの態度は気のせいだったのだろうかと思いつつ、まあどうでもいいかと頭を振る。

自分の演奏を好いてくれる人間は今までに何人も居た。それなりの場所で弾けばそれなりの拍手は貰えたし、称賛の声も随分と聞き慣れてきた。音楽室で弾けばそれを聞いて駆けつけてきた人間が凄いだの素敵だの騒ぐし、それは小さい頃も今も変わらない。

しかし初対面の人間に笑顔で酷評をされるという経験は体験したことがないし、しかもその人間はそれでも「気に入った」と言う。

——どっちが変なやつだよ。

青年は小さく溜息を吐く。そこに不快な表情は浮かんでいない。

「……猫の特徴は？」

「は？」

我ながら珍しいというからしくないなと思うが、たまにはそういうことをするのも悪くないかなと自分を言い聞かせる。

「俺の所為で猫がどっか遠くに行かれても困るし、どこかで見かけたら連絡するから」

「いいけど、でもただの真っ白な子猫よ？ どこにでも居るような」

「鈴とかは」

「左耳に付けてるけど玉が入ってないから鳴らない」

白だの子猫だのよりそっちの特徴の方が判りやすいんだから先に教えて欲しいと心の中で呟いておく。

「……あんたってさー」

月光に照らされて銀色の髪は青く輝いているように見えた。

不思議そうな可笑しそうな、なんとも言えない表情で少女は青年を見る。

「やっぱ変なやつよね」

「まあ、そうかもな」

「あ、自覚してるんだ」

「三回も言われれば」

0. ノクターン第2番変ホ長調Op.9-2 #4

あれから二週間が過ぎた。

体育館での閑散とした演奏会は二日に一遍くらいの割合で行われ、相変わらず奏者も観衆も一人ずつと、表面上は何の変化もない日々が続いている。

内面的にも変化がないのかということもそういうわけでもなく、青年の演奏に対する少女の評価は着実に上がっていった。一昨日の評価によれば「八十三点」と、初日に比べればそれなりに聞きやすい演奏へと成長している。

敷地を囲う柵をひょいと飛び降りながら少女はそんなやりとりを思い出していた。

周田は見慣れた宵闇。校門の側に立っている桜や杉、銀杏の木などは既に色を染め始める時期だがこの闇に包まれた世界ではその判別はつきにくい。煌々と照る街灯のすぐ側にある葉を見るに、銀杏はそれなりに色を変えてきているのだろうということだけは知ることが出来た。

肌寒い風がさわりと頬を撫でた。じきに秋がやってくるだろう。

体育館はいつも通り校門の斜向かいにそびえ立ち、校舎に備え付けられた時計は十二時半を既に回っている。普段ならば日が変わる前には到着しているのだが、今日は途中で寄り道をしてしまったためにこんな時間になってしまった。

寄り道というの、学校へ足を運ぶ道すがら「彼女」の気配を感じ取ったからだった。今までは完全に音信不通で気配や足跡すら知覚できなかったというのに、今日になって突然近くに居るような感覚がしたのだった。

その動きは奇妙なもので、まるで逃げるようにこの地区をうろうろと動き回っていた。いくら疾駆しても距離は縮まらず、かといって遠のくわけでもなく。同じ路地をぐるぐると回ることもあった。連絡を取ろうとしても一方的に回線が遮断される。

——どう見ても罨よね、これ。

彼女がこうまで素早く動けたような覚えは記憶にない。ましてや逃げられるような覚えも、「まあ……なくはないけど」

体育館から響いている柔らかな旋律に耳を傾けて、少女は小さく唸る。

初めはただの偶然だった。

たまたま彼らに追われて逃げ場を失ってこの敷地の周辺を彷徨っているところ、偶然にもその演奏を耳にしたのがことの切っ掛けだった。心地よい音楽と静かな空気の流れに身を寄せて、ただ一時（いっとき）の雨宿り程度になればいいと思っていたのが、気付けば二週間も入り浸る結果となっている。

止めておけばいいものを、どうしてあの日「毎回来る」などと言ったのか理解に苦しむ。そもそも自分には彼女を捜す使命があったはずなのに、それをおざなりにしてまでピアノを聞く必要がどこにあったのか。

「……………はぁ」

少女は一つ溜息を吐く。

そもそも奏者があんな変なやつだからいけないのだと思う。この世の何処に、突然の侵入者を特に気に止めるでもなく受け入れる人間が居るのだろう。自らの領域を突然踏み荒らされれば、動物だって普通は声を荒げて威嚇する。

形は違えど人間だってそうする。少女が今までに出会ってきた人間を思い返せば、彼・彼女らは皆一様に奇異の目を向けてきた思い出ばかりが蘇る。少し常軌を逸した言動や態度を見せたり、拳句は髪の色にすら驚きを隠さないというのに。

しかし少女に対する彼の行動はそれらとは全く違った。

何の疑問も抱かずに——抱いたかもしれないが、それは別段気になることでもないと言った

——変なやつ。

そう、全てはそれがいけなかったのだ。あの青年が浮世離れした妙な人間だから興味を引いてしまった。少女はそう思うことにした。猫が見つからないのもあいつの所為。

「それにしても、ここは」

今はそうやって一人の人間にかまけている場合ではないことを思い出し、素早く思考を切り替える。

校門の隙間をぬって、冷たい風がそよりとスカートの裾を揺らした。

少女は視線を周田に巡らせる。この場所はどこからどう何度見ても、ここ二週間通い慣れた夜の学校。彼女の気配を追って辿り着いた先がここだった。

少女が知る限り彼女がこんな場所に足を運ぶ理由などない。自分が居たような痕跡を嗅ぎつ

けでもしたのだろうかとも考えたが、そうすると逃げる理由がますます理解できなくなる。

確かにこの二週間、搜索を真面目にやっていたかと問われたら頷きづらい。二日に一度はこの場所に足を運び、ゆったりと音楽に聴き入る日々を送っていたのだから。こちらに来てからあちこちを転々としていてちっとも休むことの出来なかった身体なんだから少くくは休んでもいいじゃない、と言いたいところだったが、こんなことばかりしているから懐いてくれないのかもしれない。

そのことを思い返すと少女は溜息を吐く。彼女のこととなるとつい問題を先送りにしてしまう。そうやって避けてばかりいるから未だに他人行儀に接さざるをえないということを判ってはいるのだが、頭で理解していても行動に移すというのはとてつもなく高いハードルのように思える。

避けて通るべきではない道だと判っていながらも、やはり上手くはいかないものだ。

しかしそうして足踏みしていても問題は解決の方向に向かうはずもなく、また、今は置かれた状況が状況なだけに避けていられる場合でもない。

再びそよりと撫でる風が、肩に掛かった銀色の髪を翻させた。

「それで、いつになったら出てくるわけ？ 覗き見だなんて悪趣味だと思うけど」

そして少女は、林立する桜の木に向かって吐き捨てるようにそう言った。

そこに在るのは夜の闇と優しいピアノのBGMだけ——であるはずの空間に一つの黒い影がぬらりと浮かび上がった。

その影は長身の男の姿を成し、それに続いて他の木々からも同様の影が姿を見せる。それぞれ一様に長い黒衣を纏い、初めに現れた男を除く全員が深々とフードを被っていて性別すら判別が出来なかった。

十人ほどの黒衣の者たちは足音もなく移動し、やがて少女の周りを円形に囲む。打ち合わせでもしていたかのように円周上に並ぶと、位置に着いた者から腰にさげられていた西洋刀を抜き放ち、胸の前でびたりと構えると、やがて微動だにしない。

その一連の動作は無駄一つ無い、軽やかな動き。少女は彼らの動きを見るのは初めてではないが、その動きは何度見ても息を呑むほど精練されている。

そんな様子を、実際はさほど興味もなく見つめているうちに、少女と長身の男の二人だけが、黒と銀に染まった輪の中に居る形となっていた。ゆるゆると流れていた空気は一気に堰き止められ、突如密閉空間のようにぎゅっと凝縮されたようになる。

少女は腕を組んで男を睨むように見上げた。

「相変わらず大歓迎ね。たった一人の小娘相手に、よくまあ飽きずにこれだけの人員を注ぎ込むわね」

「アンタはそんだけの重要参考人ってことだ。結界を解析するのにも、随分と骨を折らされたよ」

リーダーと見受けられるその長身の男も、眉一つ動かすことなく少女を見下ろす。男の口からは決して高くもなく低くもない、聞き取りやすい綺麗なテノールの声が続いて紡がれる。

「アンタはこの世界には居ちゃいけない異物だ。即刻排除しなきゃならねえ存在なんだが、同時に国内でも第一級の確保対象。こちらとしてもアンタに粗相のないよう迎え入れたいんでね、これもこっちの意思の表れと受け取って頂きたいな」

男は恭しく口上を述べるも、頭を垂れたり跪くような様は見受けられない。何度も聞き慣れたその定型句をただ淡々と聞き流して、少女は表情を歪める。

「どこが粗相のないように。あの子をさらっておいて、よくそんな言葉が出せるもんね」

一瞬だけ男が顔色を変えたようにも見えたが、気付くとすぐにまた元の何もない表情へと戻っていた。男はやれやれといった具合に頭を振る。

「思い違いを起こしてもらっては困るんだが、俺はアンタを歓迎するとは言ったが、この小さな猫まで快く迎え入れるだなんて言ってない。確かにこいつも少々気になる存在だがね、そんなものはアンタに比べれば石ころ程度の存在価値しかないんだよ」

いつの間にか男の腕の中には真っ白な猫が横たわっていた。耳には玉の入っていない鈴が付いている。腹部はゆっくりと上下し、安らかな表情をしているが意識はなく眠っているように見えた。

「あんたたちにとってその子も私も、あんたらの掲げる理想のための礎石でしかないのね」

「そうとも言える。だがそれはオレも、いやここにいるオレたち皆同じことだ。オレという存在ですら、この組織においてはただの礎石——道具でしかないってワケ」

周囲に居る黒衣の影たちが外部との壁にでもなっているのか、空気の流れが遮断されているようで音もなく、ひどく気分が悪かった。べとつくような夜の闇が妙に気になる。

「……ほんと、あんたたちのやり方にはつくづく呆れるわ。よくそこまで汚くなれるわね」

少女が顔をしかめるのに対し、男の口は小さく笑みの形を作る。

「汚いだなんて人聞きが悪いな。オレたちは何を優先すべきかをきちんと透察して、そして害を為す存在を淘汰していったるだけさ。理想のためには小さな犠牲も必要不可欠ってもん
だろ？」

「はっ、そうやって理想だ大義だと掲げれば何をやっても許されると思ってる、その考え方が意地汚くて嫌いなのよ」

びっ、と男に人差し指を向ける。

「悪いけど、私はそうやって人質を取られたって動じないわよ」

男はそれを聞くと「へえ？」と面白そうに呟く。

「つまりアンタはこの猫を見捨てると、そう言うのかい」

腕の中で小さな寝息を立てて眠る猫の首を無造作に掴んで眼前に突き出すと、男は腰にさげた得物を軽々と抜き放ち、その切っ先を純白の猫へと向ける。

猫はそれでも目を覚ますことなく、男の為すがままにされている。

少女は顔色一つ変えずにその様子を見守っていた。

「それなら、この場で斬り捨てちまっても一切合切構いはしないよな？」

男は笑いもせず、今にも触れそうな剣をびたりと構えたまま静止している。

周囲の黒衣の影たちは相変わらず西洋風の豪華な直剣を胸の前に構え、二人のやりとりを黙々と眺めている。目深に被ったフードに遮られた向こう側にあるであろう顔は一体何を考えているのか、その無機質な動作と纏う雰囲気から読みとることは不可能だった。

彼らの存在はまるで機械のように虚ろで曖昧で、その異質な視線がむしろ無性に息苦しく感じさせる。

「……構わないわよ。その子には大した思い入れもないから」

少女が絞り出すように口にしたその言葉は、嘘とも本当とも言い難いものだった。

男も影たちも身じろぎ一つせずじっと少女を見つめている。

確かに彼女と仲直りをしたいという心はあり、その心に偽りはない。このままではいけないのだと、今までに何度も少女の側からアプローチをかけ、積極的に距離を縮めようと努力をしてきていた。

だが彼女の方はというと全くもってそのつもりはないらしく、どんなやりとりにもべもなく返られて、そして今に至っている。

思い入れがない、というつもりはなかった。むしろ自分には自分なりの思い入れがあると断言できる。しかし、それに応じて貰えたことなど一度もなく、こちらに来てからはまともに目を見て話してくれたことなど一度もなかった。それ故に思い入れというものも気付けば、どこかもう冷めてしまった感があるのは少女にも否めなかった。

何をしても進むことのないその関係に、もう疲れてしまったのかもしれない。

男はしばらく押し黙った後、ふと可笑しそうに口の端を歪める。

「何が可笑しいのよ」

「アンタは、自分が言っていることに矛盾を感じないのかい」

少女は無言で返す。

「自らのためにこの小さな命を犠牲にしてまで生き延びる。それってのは、さっきアンタが否定したオレたちの大義のための犠牲ってモンと同じじゃないか？」

「……詭弁ね。あんたがそういう選択肢しか与えないからそうせざるを得ないってだけでしょ。そっちが巻き込んでおいて良く言うわね」

だが心の何処かで、男の言い分は間違っていないという思いもあった。

男の言う通り、これは自らが生き長らえるための犠牲。彼女に気を留めず、ただこの場から離れることだけを考えるのならそう難しいことではない。見捨てるという選択肢が最も正しいのかもしれないが、だがそれは彼らが言う大義のための犠牲と何ら変わりがない。

そうと判っていてもそれを受け入れるわけにはいかない。受け入れれば彼女も自分も彼らの手中に落ちると、少女はそう確信していた。

「だから悪いけれど、何を言われてもあんたたちに協力する気なんか——」

「おっと、ここでまだ早まって貰っては困るな」

少女が必死にたたみかける言葉を男は遮り、構えていた剣の切っ先を白い猫からゆっくりとそらした。かといって彼女を手放す気はないらしく、まだ首を掴んだままぶらりと構えている。

男の得物が指し示す方角にあるのは、大きくどっしりとそびえ立つ学校の施設。中からは今も絶えず柔らかいピアノの旋律が流れている。

その視線は真っ直ぐに体育館の中に居るであろう人物を見据えていた。
「最近、いたくご執心の人間が居るらしいじゃないか。どうやら良いピアノを弾くんだそうで」

「な……ッ」

それまで男の言葉など大して歯牙にもかけず斜に構えていた少女は、男のその言葉に遂に顔色を一気に豹変させた。

そこにはもう余裕の欠片も存在しなかった。

「あいつは、私とは何も関係ない一般人よ?! 何を考えて——」

「へえ、関係ないなら気に留める必要なんかないんじゃないかい? ただの一般市民が生きようが死のうが、関係のないアンタには尚更どうでもいい些末事だろ?」

「そういうことじゃなくて……!」

少女は自然と拳をぎゅっと握り締める。

「あいつは私たちのようなものとは無縁の、ただの高校生よ。そりゃちょっと変わってるけど、そこらへんの学生と同じように、普通に青春を謳歌してる一般人。そんなあいつをどうにかして、あんたたちの守るべき『律』に影響が出ないとでも思っているわけ?!」

声高にまくし立てるも、男は全く意に介した様子はない。

「たった一人の、それこそ一般人が消失したところで律に大した影響は出ないさ。当然、影響が全くないってワケじゃないけどな。だがそんなものもアンタという存在と比較しちゃうと、オレたちのとるべき行動は、アンタにだって見えてくるってモンだろうよ」

少女はぎり、と歯がみする。

「……どこまでも汚い連中ね、あんたたちは……ッ!」

「お褒めの言葉として受け取っておこうか」

気味が悪いほどに紳士的な笑顔を浮かべると、男は恭しく会釈をする。その行為に少女は吐き気すら感じた。

「どう思おうが勝手だが、現状で彼の生死を決めるのはオレじゃない。アンタの選択だ」

「……………ッ」

「アンタがオレたちに協力してくれるっていうのなら、この猫とピアニストの彼からは一切手を引く。だがもし断るっていうのなら、不本意だが相応の対処ってのをとらせてもらう。どうだい?」

本来はこんな選択など迷う必要はなく、ここで「断る」と言えば何の問題もない。

だが、何故かそうやってしまうことを躊躇っている自分に、少女は気付く。

おかしい。出会ってから二週間、何度か顔を合わせたというだけのただの一般人に何を拘っているのか判らない。ピアノが少し上手くて、少し性格が変わっているというそれだけの人間。男の言うように、そんな名前も知らない人間が生きようが死のうが少女の知ったことではなかった。

そのはずが、どうして「断る」と言えないのか、全く理解が出来ない。

「……………」

緊張に満ちた空気の中、今も流れる優しいピアノの音色。

それはどことなく寂しさを孕んでいて、敢えて評価するならば「六十一點」といったところ。先日と比べるとあまり褒められた演奏ではない。

少女は視線をゆっくりと体育館へ向けた。黒衣の影たちの向こう側にどっしりとそびえ立つ巨大な建造物は、まるでそれ自体が一つの楽器であるかのように旋律を奏でている。

その中で一人、ぼつりと黒い筐体に向かって青年の姿が思い浮かべる。

初めてこの場所を訪れて目にしたその時の光景は、素敵な空間というものとはほど遠いものだった。生気がぽっかりと抜け落ちたような雰囲気と演奏で空気が充ち満ちていた。今もまさに、あの時と同じような音楽が流れてきていた。

全然変わっていない。いや、むしろ悪くなっている気さえする。

「……わかった」

自分が潔癖性である、などと少女は一度も思ったことがない。寝癖も悪く、部屋が荒れていても気に留めたことなどなく、むしろ大雑把な部類に含まれると思っている。

だがこの演奏は聴くに堪えない。このまま放っておくのはどうにも癪に障る。

「でも、その子とあいつの無事だけは約束して。それが出来ないなら断るわよ」

目の前に立ちただかる男はにこりと紳士的な笑みを浮かべる。

「その点は勿論保証する。オレたちも極力、律に影響は与えたくはないからな」

「もう一つ」

男が言い終えるかどうかで、少女はそれを無視して視線を男にぶつけた。

「その子——エレナを、あいつに直接預けたいんだけど」

男の腕の中にいつの間にか戻っていた白い猫は相変わらず死んだように眠っている。

男は暫く悩むようなそぶりを見せ、

「……それに乗じて逃げるなんてことは」

「しないわよ。そんな姑息な真似、あんたたちじゃないんだからするわけないでしょ」

諦めたかのように一つ溜息をつく。

「……オーケー。ただし、もし少しでも逃げるような素振りを見せれば、その時は両者の命はないと思えよ」

「わかってるわよ」

そうして男は得物を豪華な鞘に収め、眠る猫を少女へと手渡す。

少女は優しく抱きとめると、数週間ぶりに再会した彼女を撫でる。その姿は最後に見た時よりも妙に弱々しく、そして小さくなっているように見えた。

抱きしめたまま、誰にも聞こえないような小さな声で「ごめん」と呟く。

円周上に並んでいた影たちの一部がさっと開き、体育館へと送り出すように道を開く。卒業生を送り出す在校生の花道のような景色だったが、嬉しさなど込み上げてくるはずもなかった。

体育館に向けて一步踏み出す。

この子がこうなってしまったのも、あの青年まで巻き込んでしまったのも全て自分の責任だと判っている。だからけじめをつけなくてはならない。

少女はそう思いながら、漆黒の風の中を歩いていった。

0. ノクターン第2番変ホ長調Op.9-2 #5

ラの音を静かに発して、漆黒の筐体は長い夜想曲を歌い終えた。

ん、と小さく声を出して椅子の背もたれに寄りかかるようにして大きく伸びをする。木製の椅子がきゅうっと軋む音が、聴衆の居ない空っぽの体育館に反響した。

鍵盤の上を舞っていた踊り子をだらりと下げて、真っ暗な天井に向かって青年は一つ息を吐く。

ここ二週間は演奏後に凶々しく酷評をぶつけてくる妙な少女が居たため、演奏後にはそれをぼんやりと聞いて適当に相槌を打ってれば、いつの間にか夜が更けて帰ろうという気にもなった。

しかし、今日はその相棒もまだ姿を見せていない。

彼女と出会う以前はずっとこうだったはずなのに、あの時は演奏後に何をしていたのかすっかり忘れてしまった。この空虚な体育館を見つめて何か感慨にふけていたのだろうか。それともさっさと帰宅して布団に潜り込んでいたのだろうか。

それすらも思い出せず、考えていくうちに段々と億劫になってきて思考を停止した。

椅子に再び体重を預けると、再びきゅうっという間の抜けた音が響く。

このまま帰ってしまおうかなどと考えていると、ふと視界の端に白いものが映った。青年が視線をそちらに移すと同時に、

「四十点」

聞き慣れたアルトの声が響いた。

「さっきまではもうちょっと評価高かったんだけど、聞いていくうちにどんどん不快になってきた。今日の演奏はいままで聞いた中で一番ひどい。仕方がないから弾いてるって感じで、感情がまるで抜け落ちてたわよ」

体育館の正面入り口のドアを開け放ち、青年の居るステージへ向かってずんずんと歩を進める。一步踏み出すごとにぎしぎしと床が声を上げた。

宵闇に包まれて読めなかった表情が徐々に明らかになってくる。普段と大して変わらないきょとんとした表情。

「初日の演奏はまだ聞けたけど、今日のは聞けたもんじゃなかったわね」

だが少女を見つめていると、小さな異変に気が付く。

腕の中に、あまり大きいとは言えない真っ白な猫を抱いていた。耳には何か金色に光るアクセサリーが付いている。

「その子があんたの探してた猫か」

青年は驚くこともなくその猫に見入る。包まったまま動かないところを見ると、どうやら眠っているようだということが判る。

少女は顔を綻ばせることもなく、一つ頷いた。

「ここに来る途中に見かけてね、追いかけてたら結構時間が経っちゃって」

「何にせよ、見つかってよかったじゃんか」

「うん」

少女はステージ脇の階段をとんとんと上ってピアノの側まで来ると、先程よりももっと表情を殺した顔をして青年を正面から見つめた。椅子に預けていた上体を起こすこともせず、青年も視線だけで少女を見る。

「……その割にはあんまり嬉しく無さそうだけど」

「そう見える？」

「なんとなくな」

白々しいなと思いつつも、青年は少女の次の言葉を待つ。

少女は何かを逡巡している様子だった。

視線をそらして何かを考えこむ。じっと足元の方を見やって十秒が経ったころ、少女は白い猫を優しく撫でてから、青年を見ずにゆっくりと口を開いた。

「少し遠くに行かなくちゃならなくなっ」

「それはまた、突然だな」

「さっき急に決まったの。今夜のうちには発たなければならなくてね」

青年は上体を起こして少女をじっと見つめるも、少女は変わらず視線をそらしたまま。

「こっちには、戻って来るのか？」

なんとなしにそんな言葉が出た。

「どうかな。早ければ明日にでも戻ってこれるかもしれないし、もしかしたら戻ってこれない

かもしれない」

「そっか」

そういえば自分の方から真っ当に質問して、真っ当に返事が返ってきたのは初めてかもしれないと思う。そもそも今までさほど興味も湧かなかったというのに、今になってこんなことを訊いているというのはどういう心変わりなのか。

長いこと居着いていた猫に愛着が湧く——そんなものなのかもしれない、と解釈しておくことにした。少なくともその解釈で大して間違っていないだろう。

青年が黙っていると、しばらくして少女が「それでなんだけど」と切り出した。

「この子を連れて行けないから、あんたちょっと預かってくれない？」

「いいけど……折角見つかったのに連れて行かなくていいのか？」

「私も連れて行きたいんだけどね、この子は連れて行けないって言われたの」

少女が顔を上げた。そこには青年が今までに見たことのないような、名残惜しそうな表情があった。その猫が本当に大切なんだと、青年の目にはそう映った。

特に断る理由もなく、元より邪険に断るつもりもなかったので引き受ける。

「ていうか、なんで俺なの」

「ん？」

「別に断るつもりはないんだけど。でも俺なんかじゃなくて……こういうことはもっと、頼れる友達とか知り合いとかに頼んだ方がいいんじゃない？」

「そういうの、居ないから」

青年が言い終わるよりも早く、少女はにべもなくそう答える。

しばらくの間をおいてからようやくその言葉の意味に気が付き、青年は「あー……」と情けない声を出しながら、気まずそうに頭の後ろを掻いた。

どんな言葉を掛けたら良いのか判らずに台詞を考えていると、しかし少女は特に気にした風もなく、

「それに、あんたじゃないと困るから」

「は？」

「ううん、何でもない」

腕に抱えていた猫をそっと手の中に抱くと、青年へと差し出した。

青年は慣れた手つきでひょいと受け取ると、意外にも軽いその身体を抱き抱えるように腕の中へ収める。

近くで見るとそれなりに小さくはない猫だということが判る。何という種類の猫なのかは知らなかったが、体格や毛並みから判断するに栄養状態も良く、飼い主——少女によく懐いているんだろうということが容易に察せられた。

撫でてあげようかとも思ったが、いきなりそんなことをやって目を覚まされても困るのでやめておいた。

ふと少女の視線に気づく。

「あんたってやっぱり変なやつよね……猫を飼ったことがあるの？ 随分と慣れているように見えるけど」

青年は椅子に座り直して頷く。

「小さいころに実家で飼ってた。もう随分昔に死んじゃったけど」

「そう。なら私も安心して預けられるわね。……殺さないでよ？」

少女はあまり感情のこもっていない——青年から見ると作り笑いのような笑顔を顔に浮かべていた。本人は一生懸命隠しているつもりなのだろうが、青年から見るとばれればれた。

なんでそんな顔をするのかと問いたかったが、やめた。

「まあ、死なすようなことはしないよ。勝手にどっか行ったりしなければ」

「その時はしっかり追ってよ」

「面倒くさい」

「あんたねー……」

はあ、と一つため息をつく、少女はピアノを眺めて表情を緩める。

「……しばらくあんたのピアノも聞き納め、か」

どことなく感慨深そうに言う。

漆黒の筐体をじっと見つめて、そしてくるりと体育館の広い空間へ視線を向ける。何もあらずの空間を見つめて何を思っているのか、青年には判らない。

「あんたの酷評がなくなるかと思うとせいせいするけど、寂しくもあるな」

ぼうっと少女が見つめている方向と同じほうへ視線を投げた。体育館の窓やカーテン、天井が暗い空間を閉じこめている。外からは木々の葉が擦れ合う音も聞こえる。良い月夜なんだろう

うな、と想像したが今日は新月だったということを思い出した。

新月でもさほど暗くはないご時世だが、いつも空に何かが浮かんでいるということに慣れてしまうと、それも少しだけもの悲しく思えた。

青年と少女はそうやって十分ほどぼんやりとしていた。会話もなく、具体的に何かを待っているというわけでもないが、ただ何かを待つかのように惚けていた。

空気の粒が擦れ合い、移動する音さえ聞こえてきそうな静かな夜。

腕の中の猫はまだぐっすりと眠っていた。待っている何かというのはこの子が起きることかもしれないと思ったが、到底起きるような気配はない。

上体をピアノの筐体に預けていた少女はゆっくりと上体を起こす。んっ、と伸びをすると口に手を当てて欠伸をする。それを見ていたら青年も、昼間の授業で溜まった疲れの所為か、大きな欠伸が出た。

少女はその様子を見てくすりと笑う。今度は、作り笑いではなかった。

「あんたって、なんでピアノが弾けるの？」

「.....は？」

随分唐突な質問だった。少女ははっとして少し言い方を変える。

「あんたって、そうやってるとただのぐうたらな学生にしか見えないのに、でもなんでかピアノは上手いじゃない。それが妙に不釣り合いなのよね」

「褒めるかけなすかどっちかにしろよ.....」

心底不思議そうにしているところを見ると、やはりけなされているのだろうかと思

。「昔——こっちに出てくる前に、無理矢理習わされてたからな。面倒だからってさぼることも多かったけど、でも他にやることもなかったから結局のところ、手持ち無沙汰な時にはピアノに向かった」

つつ、と目の前に構えるピアノの縁を指でなぞる。なぞった部分には白い指紋の跡が浮き、指を見るところすらと黒い埃がこびりついていた。

「その習慣が残ってるのかわかんないけど.....まあ残ってるからなんだろうな、だから今でもこうやって、夜中に忍び込んでまでピアノを弾いてる」

黒い埃を親指でこすってもみ消すが、指紋の間に挟まったそれは完全に消すことはできなかった。

「.....だからかもしれないな」

「何が？」

「あんたからいい評価をもらえないのが」

少女はきょとんとした表情で青年を見つめる。

「そうやってただ何となしに弾いてるから、なんか味気無いっていうか、はっきりとしないっていうか、そんなだからだめなんだろうなー。まあ、よくわかんないけど」

青年はそう独り言のように呟いた。考えながら喋っているうちに段々とどうでもよくなってきたのもあって、最後の方になると投げやりになっている。もともとそうやって何かを分析したりするのは好きでも得意でもない。

そうしていると、いつの間にかこちらを向いていた少女の視線に気付く。ピアノの真横に直立し、真剣な眼差しで青年をじっと捉えていた。

「じゃあさ」

「ん？」

何処から入り込んだのか、ひんやりとした夜風が銀色の髪をふわりと揺らす。

「私が帰ってくるまで、私のためにピアノを弾いて」

瞬間、風も時も静止したかのように二人の動きも音も止まった。。

青年がはっとして視線を泳がせると、風は脇を通り抜けて何処かへと消え去って行った。しかし直立不動の少女の髪は名残惜しいのか、いまだにそよそよとたなびいている。

一瞬何を言われたのか判らなかった。普段滅多に使わない頭をフル回転させてその言葉を反芻し、だが突然その言葉が出る意図や意味がさっぱり理解できず、

「.....は？」

考えあぐねること十秒。喉をついて出てきた言葉は結局それだけだった。

少女は盛大にため息をついて、呆れと落胆の入り交じった表情をする。

「.....あんた深く考え過ぎ」

顔に手を当ててもう一度ため息をついた。

「じゃ、それどういう意味」

「どうもこうも、そのままの意味よ。あんたって今まで誰かのため、いや、何かのためにピアノを弾いたことないでしょ。だったらこの際、私のために弾いてみなさいよと、単純にそういう意味」

「なんだ、それでいいのか」

特に他に考えつく意味もなかったが、それでもいつも突飛な発言をする彼女のことだからまた何か他意でもあるのではないかと青年は疑わずにはいらなかった。もっとも、そういう言葉の裏を勘ぐるのも得意ではなかったのだが。

何だと思ったのよと少女が訊ねてきたが、特に何も思い付かなかったと適当に誤魔化しておいた。

「まあ、考えておくよ」

「そうして。帰ってきた時に今日みたいな下手な演奏なんか聞きたくないから」

「厳しいなー」

少女はくすりと笑む。

「今に始まったことではないし、もう慣れたでしょ」

「そうだな」

青年もそれにつられて頬が緩む。

少女がこれから何処かへ行ってしまってもう帰ってこれないかもしれないとまで言われても、青年には実際のところ、あまり実感は湧かなかった。少女の言葉を信じていないという訳ではなく、むしろ疑う気などこれっぽっちもなかったのだが、どうにも緊張感に欠けるこの状況がそう思わせないのかもしれないなどと思えた。

腕の中の猫がぶるりと震える。起こしてしまっただろうかと驚いたが、そのまままた眠ってしまった。寝返りみたいなものかと解釈して安堵する。

顔を上げると、少女は人差し指をくるくると動かしていた。

その瞬間、一瞬だけ指先が青白く発光した。

少女はその指先を何事もなかったかのように上着のポケットに無造作に突っ込むと、ひょいとステージ下へ飛び降りる。

本当に一瞬のことだった。特に眩しくはない小さな光だったが、確かに間違いなく光っていたのを青年は見逃さなかった。

その光は少女と初めて出会った日に見た光と、全く同じものであるように見えた。

青年は今の光が何だったのかと訊こうとしたが、既に少女は体育館の出口に向かって歩きだしていた。

「……行くのか」

訊くタイミングを逸してしまい、改めて訊くのもなんだか億劫になってそれだけ言う。

その言葉に答えるかのように少女はくると向きを変えて青年を見上げる。宵闇の濃さに紛れてその表情は読めなかった。

少女はこくりと小さく頷いた。

「それじゃ、その子をよろしくね」

腕の中の猫をちらりと見やる。帰ってこなかったらどうするんだろうと思いつつも、たぶん帰ってくるような気がしたので訊くのをやめて「あいよ」と返事をする。

再び身体の向きを反転させ、フローリングの床をぎしりと鳴らしながら一步一步離れていった。

銀の髪がかかった小さな背中が徐々に小さくなっていく。大して広い建物でもないのに、青年には妙に遠近感を感じさせられた。大きく口を広げた鯨の中に一人突っ込んで行くような、滅茶苦茶だが必ずしも間違っただけさそうなイメージがぽっと湧いた。

青年は椅子に座ったままその姿を眺めて、

「またな」

と小さく呟いた。

それが聞こえたのか、少女は片手を上げて返すと、青年を見る事なく出口を潜っていった。

雲一つない新月の空を見上げていると、ふあ、と大きなあくびが出る。それにつられるかの

ように、腕の中の猫も同じようにあくびをした。それに気づいた青年がその様子をじっと見ていると、ゆるゆると重そうな臉を持ち上げる。

「……よっ」

その猫はその言葉に触発されたように、慌てて青年の腕から飛び降りた。少し離れた位置のコンクリートの上に着地すると、青年をじっと見据えて小さく身構えた。

青年は「あー」と困ったように肩を竦める。

「そういえばお前、寝てたから知らないんだっけ。あいつ説明抜きで押し付けたな……」

そうぼやきながら頭の後ろを搔いて、視線を降ろす。特に興味もなさそうな、しかし仕方ないなといった目付きだった。

「お前のご主人様から、しばらく預かってくれて頼まれて、別に危害を加えたりするつもりはないから、警戒しなくても……って言ったって無理だよなー……」

青年は一人で唸った後、ため息をつく。猫を見ると少しばかり警戒を解いたように見えなくもないが、青年に猫の表情を読む特技などないので本当かどうかは定かではない。

どうすれば良いのか考えているうちに、頭の中がごちゃごちゃしてきたので考えるのを止めた。

「……ま、とにかくよろしく、エレナ」

青年は屈んで猫の頭を優しく叩いてから、その子を置き去りにして自宅へと足を向ける。

猫は数秒間じっとその後ろ姿を見つめていたが、しばらくするとそれを追うように駆け出した。

0. ノクターン第2番変ホ長調Op.9-2 #6

目を覚ます瞬間というのは曖昧。目が覚めた、と気が付いてもそれが夢である場合だって考えられなくはない。

だから目を覚ました瞬間、今自分が見ているモノが夢か現かを即座に判別することは出来ない。実際にそれをそれと認識するまでは、非常に曖昧な世界に自分は置かれているんじゃないかと思わされる。最も、それがそれであると確認づける要素すら、夢か現なのか判断出来なければ意味を為さない。

胡蝶の夢という逸話がある。二つの次元を行き来していた結果、自分はヒトであると思わせていたアイデンティティが崩れてしまう。

結局のところ、眼前に在る物体や事象が夢なのか現実なのか、その人間がどう世界を解釈するかによって決まるのではないだろうか――

寝ぼけ眼をこすりながら、どこかで会ったような少女が呟いていたそんな言葉を思い返していた。少なくとも青年にはここまで小難しいことを考えたりする思考回路はない。普段ならばまだしも、寝起きならば尚更だった。

カーテンのすき間から入ってくる日光が眩しくて目を覚ましたものの、寝起きは最悪だった。眠気が抜け切っていないことに加えて、暑い。まだほのかに残る夏の暑さが今日は一段と増して、適当に被っていた毛布も、知らず知らずのうちに蹴飛ばしてしまっていたようだ。ベッドの下にもみくちゃになって落ちている毛布がそれを物語っている。

枕元に置いてある携帯電話を拾い上げて画面を見ると、無機質なデジタル時計は十一時を示していた。

青年はそれを五秒ほど見つめた後、蓋を閉めてベッドの上へ放り投げた。

遅刻してしまったものはどうしようと覆せるものではなく、諦めてシャワーでも浴びてくるかと思いつく。青年がベッドから足を降ろすと、しかしそこに毛布とは違った感触の材質が裸足に触れた。

訝しんで足元を見やると、そこには真っ白な毛玉が鎮座していた。

その猫は、青年が目を覚ましたことによろやく気が付いたのか、身体をぴくりと震わせるとすぐに青年との間に距離をとる。特に威嚇する様子はないが、かといって警戒を解くような様子もない。

「おはようさん」

青年がいつも通り挨拶をしても、猫はあくびをかみ殺したような表情をしてその顔をこすっている。少女と別れてから三日が過ぎていたが、青年はまだ鳴き声を聞いたことがなかった。

青年は部屋の箆笥から着替えとバスタオルを探し出し、それを抱えて寝室を後にした。白い猫もその後に続いて、小走りでリビングへと向かう。

テーブルにソファと、椅子が二つ。他にテレビと空調機といくつかの青い観葉植物がある程度の、こざっぱりとしたリビング。服や雑誌が散らかっていたりということはなく、しかしところどころに埃が積もっていたりもする。青年にとってはこれでも割合綺麗にしてある状態だった。

テーブルの上に放ってあったリモコンを操作してテレビを点け、チャンネルを一通り回してからNHKに固定する。いつの間にか青年の脇にいた猫は、テレビの一番見やすい特等席へ飛び乗ってそのまま昼前の紀行番組に見入っていた。

青年は寝ぼけ眼をこすりながら風呂場へと向かう。シャワーの温度はやや低めにとって、ゆるゆると身体を洗っていく。

妙な少女と会ってピアノについて批評を聞いていた日々など、まるで夢の出来事のように青年は思っていた。

少女がいなくなった途端に平和な日常が訪れて、今でもその中にいる。昼は学校でぼんやりと授業を受け、夜は誰もいない体育館で無為にピアノを弾く。今までと至って変わらぬ生活だった。

ただ、それ以前と違う点といえば、少女から預かった白い猫の存在だった。

いつも青年の斜め後ろを付いて歩き、家に帰ればずっとテレビにかじりついている。一言も

鳴かなければ、噛み付いたりじゃれついたりすることも無い。常に一定の距離を保とうとしているような、そんな感覚だった。

少女には猫の扱いに関して「大丈夫」などと言ってしまったが、正直なところ猫を飼っていたころの記憶などは大して残っておらず、青年はその扱いにあまり自信がなかった。自分でもこんなもので良いのだろうかと思いついて半信半疑で接していたが、何処かに逃げてしまう様子もなく安心している。

飼主に似るといふ言葉がある。確かに若干そっけなくもあるが比較的素直で、あんなに癖のある飼主にはあまり似なかったんだなと感じていた。

不意に正面に備えられた鏡を見る。日本国中何処にでもいそうな高校生の顔が映し出されていた。特筆すべき特徴はなく、強いて言うならば終始眠そうな顔をしている。自分の顔はあまり好きではないが、嫌いでもなかった。

髪を軽く掻き、次に顔を洗う。

ひとしきり汗を流し、そうして青年は、あの銀色の髪をした少女のことを思い出した。

彼女が言った「私のためにピアノを弾いて」という要望に応えるべく、別れた日から毎晩体育館へと潜り込んでいた。何をどうやれば少女のためになるのか正直なところさっぱり判らない。しかしそれもまた練習の一環なんだろうと割り切ることにしてがむしゃらに弾いていた。結局いつもと変わらないとも言う。

その連日の夜更かしのお陰で、今日はついに寝坊をしてしまった。鏡をもう一度良く見ると、目の下にくまが出来ているのがはっきりと判る。この調子ではいつか体を壊すかなと思いつながらも、しかし青年は今夜もピアノを弾くつもりでいた。

情性と言われればそうかもしれない。しかしひとまずは飽きがくるまで、もしくはあの少女の酷評が再び聞ける日くらいまでなら少し無茶をしてもいいかなと思った。

「まあ——暇だし」

体を拭いてワイシャツに袖を通し、ズボンをはく。

今から学校に行くとなるとおせっかいな担任にきつく注意をされるのは目に見えていた。ついでにそういう生活にうるさい友人も混じって、休み時間は丸つぶれになるだろう。それを思うとうんざりしたが、しかしここでさぼっても特にすることがない。

どうせ暇だし登校するかなと思いついてリビングへ向かって行くと、軽快な電子音が近づいてきた。

音源である足元をみやると、少女の猫が青年の携帯電話をくわえて歩いてきていた。

青年の足元で立ち止まると、視線をあげてじっと青年を見つめる。サンキュ、と言ってそれを受け取ると、すぐに蓋を開けて受話ボタンを押す。

よく見知った名前が画面に表示されていたので、どうせまた碌でも無い用事だろうと思いつき、適当にあしらっておくことにしようと決めた。

「現在この電話は電波の届かないところにあるか、電源が入っていません。時間を置いて、またおかけ直しくだ」

「なんだ、折角例の女の子のことが判ったっていうのに、電源が入ってないんじゃ仕方がないか。それじゃ」

電話の相手は青年が言い終わるより前にそれだけ言うと、ぷつっという短い断絶音と共に通話を切った。その後には無機質な音が受話器の向こうから響いている。

ぼうっとその携帯を見つめてから、青年は足元の猫に再びその携帯を渡す。渡された携帯をくわえた猫は、特に嬉しがるでも嫌がるでもない素っ気ない態度でそのままソファの定位置まで戻っていった。携帯を脇に置くと、つけっ放しのテレビにまた見入ってしまう。

猫の割にそんなにあの携帯が気に入ったのだろうか、などと思いつきながら台所の冷蔵庫を漁る。すぐに食べられそうなものは、ゆで卵と昨晚の残りのカレー。レタスも残っているのでサラダも作れるな、などと眺めっていると、再び軽快な音楽が部屋に反響した。

今度は待っていても携帯を届けてくれる様子もなかったので、青年は猫の脇に置かれているそれを取り上げ、電話の相手の名前を確認してから通話ボタンを押した。

「何か用？」

「さっき僕が言ったこと、聞いてた？」

携帯の液晶画面の上にぼつりと開いている穴から不満そうな声が漏れる。少し幼さの残る、高めのトーンのテノール。その声は携帯の持ち主である青年よりも幾分か若そうに感じさせられる。

「聞いてたけど、別にどうでもいいし」

青年はあくびをかみ殺しながら、ソファの上で丸くなっている白い猫をちらりと見やる。面白くもなさそうな紀行番組のエンディングを見つめていた。

携帯の向こうでは呆れたような、諦めたような声が出た。

「予想通りの反応だけどね、まあそう言いなさんな。折角調べてあげたんだからさ」

「別に頼んでないし……ていうかこれから学校行くんだから、そっちで話せばいいだろ」

頭の後ろを搔いていると、友人の呆れたような声が返ってきた。

「何言ってるのさ、ついに曜日感覚までイカれたかい？ 今日日は日曜だよ」

青年が携帯を耳から離して液晶画面を見ると、確かにそこには日曜日を表わす文字が表示されていた。

これから学校に行かなくても良いという名目を戴いたというのにも関わらず、行く気になっていた心をどこにやればいいのか、青年は複雑な気持ちだった。

からからと笑い声が携帯の向こうから聞こえた。

「はは、相変わらず抜けてるってゆーか。ああそうだ、僕も暇だしそっちに直接出向こうか？」

「構わないけど、日曜と判ったからには俺、これから寝直すから」

「つれないなー」

「そもそも興味ない話なんだって」

登校の必要性がないと判ると、さらに盛大に眠気に襲われた。大きなあくびをしながらリビングの椅子にどっかと腰を下ろすと、眠そうな目のまま携帯を握り直す。

「興味があるから、この前学校で彼女のことを話してくれたんじゃないのかい」

「あれは気まぐれ」

「そう恥ずかしがらなくてもいいさ、気になってるんだろう？ 正直に言ってみなさいお兄さん怒らないから」

「切る」

電源ボタンをぶちっと押す。

しかしすぐにまた着信メロディが鳴るので、仕方なしにもう一度受話ボタンを押した。

「お前さ、あんまりしつこいと嫌われるぞ」

友人は電話の向こうで呵々と笑う。

「少なくとも君は嫌ってくれないと信じてるからね」

「いや、生まれる前から嫌いだけど」

「はは、そう照れなさんな。君はもう僕の虜だということくらい知っているよ」

「気色悪いこと言うなよ……」

このまま続けていると寝直すのはいつになるかわからない。そう思った青年は後頭部をかいて、ため息を吐く。

「……まー聞いてやるから手短にな」

「なーんだ、やっぱり興味があるんじゃないか」

携帯の向こう側にいる友人がにやにやと嫌みったらしい笑顔を浮かべている様が浮かんで、青年は表情を歪める。

「やっぱ切る」

「はいはい手短にやりますよ」

いかにもわざとらしい咳が聞こえ、先程よりもやや神妙な声が携帯から漏れた。

「『異界からの来訪者』——そして『銀波（ぎんば）の魔女』。どんな意味合いがあるか知らないけど、連中は彼女のことをそう呼んでるみたいだね」

青年は顔をしかめつつも、黙って先を促す。

「僕の調べた範囲では、その名前に関する以外には判らなかつた。その他身体的な特徴以上の、すなわち出自や性格なんかのデータはなかつたから、もしかすると連中も彼女のことを良く知らないのかもしれない」

だけど、と一層声を落として繋げる。

「しかしこうも書かれていた。『石へ至る道を識（し）りうる者』とね」

テレビの画面では今日の天気予報を伝えていた。この地域は、晴れのち曇り。

「君が遭遇したという状況から判断しても、連中は彼女のことを躍起になって捜し回っていたというのは察して余りあるね。まあ『賢者の石』と聞けば、やつらも黙っちゃいないだろーし。逆を言えばその状況からも、彼女が重要な人物であることは間違いなさそうだ」

「……」

「まあそんな経緯で先日、ちょうど四日前の深夜だね、彼女はついに連中に捕縛されたという訳さ」

何かをめくる音がする。恐らく手帳か何かを眺めているのだろう。

「今のところ判ってる情報はこの程度。現在彼女がどこにいるかまでは、残念ながら判らない」

。連中が女の子に優しくするとは考えにくい上、さらに賢者の石とくれば、相当な拷問を受けてるかもしれないね。関係ない僕まで不安になるよ」

喋り疲れたように声の主は息を吐く。しかし口調の方はというと、大して心配そうでも不安そうでもなかった。

ソファの上に丸まって陣取っている猫は、いつの間にか青年をじっと見つめていた。

猫に見つめられていると青年の腹の虫は突然、飢えた犬のようにきゅうっと声を上げた。

「あのさ、」

「ん？」

「さっぱり意味が判らないんだけど」

青年はけだるそうに椅子を立ち上がると、携帯を肩とあごの間に挟んでキッチンへと向かう。いい加減食事を作ろうと、決して大きくない冷蔵庫を開け、昨晚の残り物のハンバーグと卵を二つ取り出した。

「あのね……これ以上ないくらい判りやすく言ってるっていうのにどこが判らないっていうのさ、君は」

今のどこが判りやすかったのか青年にはさっぱり理解できない。携帯の向こう側に居る人間よりも至極真っ当な生活を送っている青年にとっては、どれもこれも聞き馴れない言葉だらけだった。友人が言うには一度聞いたことがあるということだが、覚えていないのだから仕方がない。

だがいつもそれを、さも当然であるかのように語るこの友人のせいで自分の方がおかしいんじゃないかと思わせられる時がある。実にいい迷惑だ。一体どこで学んだのか判らない知識を披露されても、基本的には青年の耳を右から左へと抜けるだけだった。

「全部」

「えー」

「えーじゃない。いきなり魔女だの石だの言われたって何なのか判らないって」

「む、そこら辺は一年くらい前に教えたじゃないか」

ハンバーグは電子レンジへほうり込んで、卵は二つとも椀の中に割った。少し砂糖を加えて、菜箸で軽くとく。

「知らない。ってゆーか聞いてなかった」

「正直に白状したのは許そう。いいかい、賢者の石ってのは中世、錬金術師が——」

この友人に悪気はないが——いやないわけでもないがこういう解説を求めると、青年にとってはあくびが出るほどのものすごく面倒臭い説明をしてくれる。

「あー……やっぱいい」

今は到底聞く気分になれないので適当に突き放す。

あごと肩の間に携帯を挟んだまま、火をつけたフライパンの上にとき卵を敷く。じゅうじゅうと焼ける音と甘い匂いがダイニングキッチンに充満し始めた。

「やっぱり直接会って説明した方が早そうだ。じゃ、今から向かうよ」

卵焼きが焼き上がる前に、インスタントスープの素をマグカップに入れて電気ポットから熱湯を注ぐ。

「さっきも言ったはずだぞ。来るのは構わないけど、これから朝飯食べてすぐ寝るから来ても無駄足だって」

「起きてる気は」

「ない」

「食べてからすぐ寝ると太るよ？」

「太らなければいいんだろ」

「つれないなー。けち」

「……飯食うから切るぞ」

ハンバーグが暖まったことを示す軽い電子音が部屋に響く。前日にスーパーの惣菜コーナーで買っておいたものでも、いざそれを目の当たりにすると空腹感が一気に加速するというものだ。青年も食事は暖かいうちに済ませてしまいたかったので、その旨を伝えて返事を待たずに電話を切った。

携帯電話をソファへ放ると、一度バウンドして猫の脇へと着地した。猫はさして驚いた風も無く、ちらりと青年を見ただけでまたテレビへと視線を戻す。今は丁度、昼のニュースをやっていた。どこかでコスモスが見ごろだとか交通事故だとかいった内容が報道されているだけで、特に目ぼしいニュースはない。

暖まったハンバーグや決して美味しそうとは言えない卵焼きを皿に盛り、それから白米を二人分盛る。青年は一方の茶碗を食卓へ置き、もう一方の茶碗と作った卵焼きの三分の一を盛

った皿を、ソファの目の前にある磨りガラスのテーブルの上へ置いた。

「今日は電話しながら作ったから、形よくないけど」

誰にともしなそう呟いてから、青年は食卓の席に着く。

青年が卵焼きに箸をつけると、猫も目の前に置いてあった皿に口をつけた。これまで通り一言も鳴かず、ただ黙々と食べていた。

不格好な卵焼きを青年も口へ運ぶ。砂糖もいれずに作ったそれは甘くもなく、しかし醤油をかけるとそれなりに美味しく食べることができた。

「ねむ……」

そう呟いて青年は、ステージ脇の階段を一段一段踏み締めるように上る。

曇りがちな空の合間から見える月をぼんやりと眺め、誰もいない舞台の上で大きなあくびを披露した。普段が眠くないというわけではないが、今宵は一層眠たく感じた。

黒光りする筐体の前まで来ると、青年が意識せずとも自然に蓋を持ち上げていた。四日も連続で通っていれば身体が覚えている。てきぱきともたらだとも言い難い微妙な速度で、演奏会の準備は進んでいった。

いつも足元にちょこんと居る真っ白な猫は、青年の体重で軋む椅子の音を確認するやいなや、ひょいと譜面立ての横に布陣する。青年は楽譜など用いない。そのためか、気付けばこの猫の定位置になっていた。

「魔女の飼い猫、ってことはエレナは使い魔ってどこか」

普通使い魔と言ったら黒猫と相場が決まっているのだと、何処かの漫画だか本だかで読んだことがあったのを青年は思い出した。しかし白いライオンがジャングルを駆け回ったりするのだから、清潔そうな白い毛をした使い魔が居たっておかしくはないだろうなどと、眠さのお陰か妙に変な思考回路が働いていた。

青年の視線に気付いてか、その猫は鳴き声など一切上げずに青年を一瞥したが、しかしすぐに丸くなってしまふ。

あの少女の代わりに自分のピアノを聞いていてくれるのだろうか、などと青年も思っただけはみた。しかしそれにしても飼主よりも素っ気なく、いつもこうして丸くなっているだけでは聞いているのかさえ判らない。

今もひとつ小さなあくびを披露している。

「まあ、なんでもいいけど」

それだけ言うと、いつものようにウォーミングアップを始める。手のひらを開閉し手首を軽くほぐして、鍵盤の上に指を構える。

指先が白鍵に触れる瞬間、体育館内に轟音がこだました。

「？」

青年がその音源の方を見やると、そこは鍵がかかっているはずの正面扉。大勢が同時に通れるよう作られた大きく重い引き戸は、轟音を発しながら宵闇に向かって大きく口を開いたのだ。

青年の脳裏に、あの少女と出会った夜がフラッシュバックしたのは自然なことだった。

体育館内を照らし出す明かりは、ゆるい月光のみ。開け放たれた扉から少しだけ視線を下げると、ぜいぜいと息を切らせた人影がそこに立っていた。

その足元には白い猫が駆け寄っている。いつの間にピアノの上から移動したのかは判らなかったが、確かにあの猫は青年が数日共に暮らした猫だった。

耳には玉の入っていない鈴をぶら下げて、人影のことを心配そうに見上げている。

「エレナ……」

その人影はしゃがみこんでその猫を抱いた。猫は嬉しそうな素振りも見せず、かといって嫌がることもなく彼女に寄り添う。

しばらくそうしていた後、人影はステージに向かってゆっくりと歩きだす。

「今日の演奏会には、間に合ったみたいね」

少女は息を整えながらそう言った。

「どのくらい上手くなったか楽しみにしてたのよ」

「そりゃどーも。でも残念ながら、全然変わってないと思うけど」

「そう？ まあ聞いてみてから判断するわよ」

少女が壇上に上がると、青年の位置からも顔色が伺えた。数日ぶりに見た少女の顔はどこか懐かしく、しかし以前よりも少しやつれているように見えた。

彼女は定位置に腰を下ろすと、決して軽くはない咳をした。

「……平気か？」

「ん、大丈夫」

それだけの短いやり取りの後、青年は鍵盤の上に指を走らせ、運指の準備運動をする。

低い音から高い音へ。次に逆を。その指遣いすらがまるで一つの楽曲を奏でているかのよう、ピアノは滑らかな音を紡いでいった。普段よりも幾分気持ちの良いリズムで指は舞う。軽快とは程遠いが、しかし心地よく耳に馴染む音を体育館に反響させながら、数分後にその前奏曲（プレリュード）は閉めくくられた。

ほっと一息をついて、首をこきこきと鳴らす。手首を軽く振ってほぐし、さて本番に移りますかと思ったところで、視界の端で少女が立ち上がっているのに気が付いた。

少女の視線は青年ではなく、広い体育館の先を見つめている。その先にあるのは開け放たれた扉があるだけ。

「上手く撒いたと思ってたんだけど、どうやら勘のいいのが一人いたみたいね」

少女は身構えるでもなく、ただ拳をぐっと握り締めていた。

少しの逡巡のあと、少女は視線だけを青年に向け、

「あんたは舞台袖に隠れてて」

「は？」

「邪魔だから隠れててって言ってるのよ」

足元で身構えていた白い猫を伴い、ステージ下へと飛び降りる。そのまま正面扉の方へ駆けようとして、しかしすぐに足を止める。

見れば扉の前には、黒衣を纏った長身の男がゆらりとたたずんでいた。

「まさか、またここへ戻って来るとは思いもしなかったな」

男はそれだけ言うと、黒衣の内側から西洋刀を抜き放つ。

いきなりあからさまなのが出てきたな、と青年が思っているうちに、少女は懐から無骨な短剣を取り出して男との間に間合いを取っていた。空いた方の手では、青年に向かってしっしと手を振っていた。

仕方がないので鍵盤の蓋を閉める。かといって整理されておらず埃の積もっている袖へ隠れるのも億劫だったので、ひとまずは二人を見守ることに決めた。

「念のために訊いておくけど、オレたちに協力する気はないってことでいいかい」

男は一步踏み込みながら西洋刀を構える。

「愚問ね。そんなことするくらいなら死んだ方がマシよ」

「ピアノの前にいる彼と、そこのおチビちゃんは」

「あんたたった一人で、私をどうにかできるなんて思わないことね」

「……オーケー。それじゃ恨みっこなしだな」

黒衣の男が一步さらに踏み出す。それと同時に、少女も床を蹴り跳躍した。

0. ノクターン第2番変ホ長調Op.9-2 #7

目の前の空間にイメージを集中する。表層意識から深層意識までを、そこに無いものがまるで元から存在していたかのように書き換える。

少女が日本語ではない言語をなにがしかを叫ぶと、少女と黒衣の男との間に七本の剣が現れる。浮遊しているそれぞれの武器は意志あるが如く牽制をし、男が疾駆してくる瞬間を狙って弾丸のように突っ込んだ。

男は大きく西洋刀を払うと、触れていないにも関わらず、四本の剣は糸が切れた操り人形（マリオネット）のように床板へと落下した。残りの三本のうち、一本は身体を捻って避け、二本は西洋刀を直接ぶつけて叩き落とす。

息をつく間もなく、少女は左手に握った短剣を構え、男の懐へ向かって突っ込む。

「甘い」

男は二本の剣を叩き落とした態勢のまま、西洋刀を横薙ぎに払う。

少女はすんでのところで体勢を屈めてそれを避け、そのまま男の脇を抜けていく。男が振り返るよりも早く、少女は再び男の懐へと身体を滑り込ませようとする。

「決定打に欠けるな。魔女とは言え、そんな飾りっ気ない短剣一本では大きな律動も厳しいんじゃないかい」

今度は西洋刀を床に擦らせ、下から打ち上げる。少女は短剣でその刀身を軽く弾き、再び男の脇を抜けて行く。

駆け抜けるやいなや、少女は文言を叫び、床板へ短剣を突き刺す。瞬間、男の周囲が青白く円状に明滅した。

のたうつ床をイメージし、その床が男を持ち上げて鉄拳を振り下ろす動きを意識の中へ鮮明に描く。そのイメージは少女の腕を伝い、短剣を媒介して、直接現実世界へと現象を具現化（コピー）する。文言は短剣の起動を促す合言葉（スペル）であり、周囲への影響を一気に促すための言わば起爆剤である。

男は咄嗟に跳躍した。それまで男が立っていた床は火山が噴火するかのように持ち上がり、そのまま巨大な人の腕を形成する。鉄拳は男よりも一回りほど巨大。腕の太さは大木程もあった。

「——ひゅう。へえ、面白い使い方をするんだね、アンタは」

それに怯むこともなく、男はただ面白そうに笑う。

下手な重機などとは比べ物にならないほど恐ろしい速さで襲いかかる腕（かいな）に、男は最低限の動きで立ち回り、握っていた西洋刀を躊躇いなく突き刺す。そうして、少女のものと同じような文言を唱えた。

瞬間、猛々しく震えていた腕は意気消沈し、見る間もなく元の何も無い体育館の空気の中へ霧散していった。

「だけど残念ながら、オレが被弾する前に調律してしまうとそれも無意味ってワケ」

跳躍したまま、落下の勢いで加速された袈裟がけを眼前で避け、少女は後方に跳躍して間合いを取る。

黒衣の男はこの戦いを楽しんでいるのか、はたまた時間を稼いでいるのか、少女に対して追撃はしなかった。初めに剣を交えた位置よりもかなりステージに近い場所に立ち、少女は呼吸を整える。

先程からほとんど受け身でしか攻撃を繰り返してこないところを見ると、やはり遊ばれているのかもしれないと思えた。仲間を呼んだようにも見えず、かといって手を抜いているようにも見えない。そう思うと腹が立つ。

「脱走の際に消耗した体力が戻っていないようだな」

男はあざ笑うでもなくそう呟く。

「先程よりもスピードが極端に落ちている。その短剣でそれだけの律動を行うのは驚いたけれど、所詮は手負いの獣ってことかい」

「……あんた、口の減らない男ね」

「同僚にも良く言われるよ。お前には緊張感のかけらもないのか、ってね。でもこうしてると落ち着くんだ」

少女はその同僚に同意した。さっきからずっと喋りっぱなしで、集中出来ない訳ではないが、うるさくて仕方がない。

そんなお喋りな相手に、少女が放つ攻撃は全て相殺されていた。先程放った七本の剣は消え失せており、操った床板も何事もなかったかのように綺麗なものに戻っていた。少女が彼らと

戦うのは初めてではない。毎度のように全ての攻撃を殺されることとなり、苦戦を強いられていた。

この男は今まで戦ってきた相手の中でも、最も技術に卓越していると言えた。素早い判断力と鋭い身体のかなしを持っている。この調子では、先に少女自身の体力が消耗し切ってしまう。それは火を見るより明らかだった。

少女は肩で息をして呼吸を整えながら、ちらりとステージの上を見る。

かの青年はピアノの筐体に頬を当て——今にでも夢の世界へ旅立ちそうな顔をしていた。

「……………」

これが灯台元暗しというのか、と少女は呆れた。相対している黒衣の男以外にあそこにも、こちらは本当に緊張感のないやつがいた。

「ちょっと、あんた」

「……んー？」

青年は実に頼りない声を上げた。

「状況わかってんの？」

少し大きめの声で呼びかけると、青年は目をこすりながら少女と黒衣の男とを見比べた。次いで彼の真横で小さく身構えている白い猫——エレナをしばらく眺める。

十秒ほど考えた後、

「今はピアノを弾くべきじゃなさそうってのは判る」

「……ホント、いい根性してるわあんた」

「そりゃどーも」

「今のは褒めてないわよ。黙ってさっさと家に帰った方が身のためよ」

青年は頭の後ろを搔いて、大きなあくびをする。

「……かったるいなー」

「あんたとてつもなく馬鹿でしょ！」

「良く言われる」

「そういう問題じゃなくて、あんたの命に関わる問題なのよ！」

「はあ」

青年はとぼけた声を上げて、再びそのまま筐体へ突っ伏した。そのまま寝るようだったら黒衣に殺される前に殺してやろうかとも少女は思ったが、それを読み取ってか否か、青年は思い出したかのように顔を上げる。

「んーでもほら、」

「何」

青年はひとつあくびをしてから、顎を筐体に乗せた。

「あんたがなんとかするんだろ？」

「……は？」

少女には一瞬、彼が何を言ってるのか理解できなかった。

「だから、俺はほとぼり冷めるまで寝る。眠いし。終わったら起こして。じゃそういうことで、オヤスミ」

そう言って青年は今度こそ熟睡モードに入った。いびきすら聞こえてきそうなほど、ぱったりと動かなくなった。

「……………」

何を考えているのかさっぱり判らなかつた。判らなくはなかつたが、実に理解に苦しむ行動だった。少女の知る限り、目の前で命のやり取りをしている時に「オヤスミ」と言って寝こけるような人間は一人もいない。常識と経験に照らし合わせてみても、常軌を逸した行動であることは間違いなかつた。

そもそもかの青年は、この常識はずれの戦いを見て何も感じないというのか。

変な奴だと思っていたがここまでとは、少女も思っていなかつた。

「はあ……、もうどうなっても知らないわよ……」

盛大にため息をつく、少女は再び黒衣に向かい合って身構えた。左手に握った短剣を強く握り直す。まだ少し息は上がっている——今怒鳴ったお陰で全然呼吸は整わなかつた——が、戦えないほどではない。気分は随分と落ち着いていた。

男はというと口に手を当てて、笑っていた。

「……何かおかしいことでも？」

「いや、なんでもない」

「あ、そ」

また少しばかり腹が立ったが、そんな感情はすぐに捨てる。今はこの男を倒すのが先決だと

、少女は次の攻撃の流れを構築し始めた。相手に相殺されるよりも、もっと素早く一撃を見舞う方法を思案し、そしてそこへと繋げるリズムを編む。

何よりもまず、相殺力を高める媒体であるあの西洋刀を封じなければどうしようもない。少女の持つ短剣と逆の力を持つ西洋刀とは、例えるならば火と水。火にあたる短剣で真っ当に戦えば勝ち目が無いのは、少女からも目に見えている。

より強い火で水に相対すれば蒸発させてしまうこともできるが、それだけの力はもう残っていない。ならば——その蛇口を攻めれば良い。

「作戦は立ったかい」

男は薄く笑みを浮かべながら、ゆっくりと剣を掲げる。

「あんたに言う必要はない」

「それはごもっとも」

そう言って、少女は再び床板を蹴った。

「ふわあ」

青年は大きなあくびをすると、エレナに手を伸ばす。が、やはりすんでのところで逃げられてしまった。

仕方ないので追うこともせず、視線を持ち上げてステージの下を見る。

時に床板が剥がれ上がって壁を作り、時に何もない空間に水柱が立つ。少女がそれを操り、またありえないほどの動きで跳躍したかと思えば、男の方は何ら怯む事なく西洋刀でそれを受け流していった。

男が西洋刀を振るうと少女が起こした異変は即座に綺麗さっぱり元に戻されていく。先程からずっとその繰り返しをしている。

「なんで俺、ここにいるんでしょうね……」

青年は独りごちる。友人にも「お前はなんでそんなにへんてこな生活してるんだ」とよく言われる。以前からよく事故現場に居合わせたり猫の死体を見かけたり、また学校で起きた幽霊騒ぎの事件に巻き込まれたりなどもしており、何か憑いてるんじゃないかと思わせられるほど悪運が強かった。そのミーハーな友人に言わせてもらえば「羨ましい体質」だと言うが、もっと慎ましく平穏に暮らしたい青年にとっては、これっぽっちも嬉しくなかった。

「……」

今度は空気中に電撃が走る。それを男が剣で受け止め、そのままの格好で少女に切りかかっていた。少女はすんでのところでそれを避け、再び間合いを取る。

「……やっぱ寝よ」

自分にできそうなことは何もないということくらいすぐに判ったので、取り敢えずは専門家に任せてしまうのが無難だという判断に至る。そう思うともう退屈なことこの上ないので、寝ることにした。

気づくといつの間にかエレナが近くに寄っている。緊張した面持ちで戦況を見守っているので、気付かれないよう後ろからそっと手を伸ばしてみるが、やはりすぐに逃げられてしまった。

どれくらい戦っているのか判らない。何分か、何十分か、それ以上なのか。舞台袖へ至るドアの上に掲げられた時計は、深夜の十二時をとうに回っていた。

手に握る短剣は刃毀れが激しく、あの西洋刀と打ち合えばあと数度ほどで折れてしまいそうだった。そうなる前に決着を付けなければ、戦況は更に不利になってしまう。

「そろそろ手詰まりかい、魔女サン」

「本当にうるさい男ね、あんた……」

少女は短剣を逆手に握る。次なる変化（へんげ）のイメージを流し込み、蓄積する。

男の方はいよいよ飽きてきたのか、少しずつ立ち回りが積極的になってきていた。少女の攻撃に対して立ち位置をほとんど変えずに受け身をとるだけであったのが、先程から自ら剣を振るって追撃を見せるようになってきた。疲れ切ったところを手早く仕留めるのだろうということは、容易に想像ができた。

まだ体力が残っているうちに何とかしなければならぬ。そのためにはまず、あの剣を封じることが先決だった。

変化させた物質でからめとっても、刀身に触れればすぐに還元されてしまう。したがって剣に触れる事なく男の手から西洋刀を手放させるしかない。それが判っていてもすべて弾かれてしまっているのだから、残された手は限られてくる。

少女が動くよりも早く、男が剣を上段に構えて疾駆した。

迎え撃つ策は既に練ってあった。男の間合いに入るまでに、六歩。

少女は短剣を握り直し、空いた手を正面にかざす。目の前の空間が一瞬青白く輝いたかと思うと、そこに無数の氷の粒が形成された。雹の如きそれらは少女の指が舞うと、弾丸のごとく一斉に男へと降りかかった。

「古典的かつ正攻法、下手な鉄砲数撃ちゃ当たるってワケかい」

男は上段に構えていた西洋刀を少しばかり下げ、文言と共に若干横に薙ぎ払う。その斬撃の軌跡よりも二回りほども大きな範囲、宙を舞う弾丸の一部が文字通り霧散していった。

だがそれで全ての弾丸が消え失せた訳ではなく、いまだに半分以上が残っている。少女は暗闇の中その状況を把握すると、意識を弾丸の方へと投げかける。短剣が淡く発光したかと思うと、突如弾丸のベクトルは変更され、男の頭上を通り過ぎて行った。

男はそれを目で追う事もせず、何事もなかったかのように剣を下段に構える。少女に向かって疾駆する足が緩むこともない。

少女も短剣を後方へ引く。空いた手の指で宙に弧を描くと、それによって弾丸も宙返りをするように進行方向が修正される。

「巧い。だが——」

自分の後方に迫った弾丸に気付いていながらも、男はスピードを落とさずに少女との距離を詰めていった。男の剣が届く間合いまで、あと二歩。

少女の目測が正しければ、男の間合いに入るのと弾丸が届くのはほぼ同時。弾丸にかまければ少女は男の隙を突くことができ、また少女に斬りかかるのであれば弾丸は避けられない。

男の間合いまであと一歩。片手で引きずっていた西洋刀を両手に握りこみ、弾丸と同程度の速さで疾駆する。

そして、少女と接触する瞬間——男は跳躍した。

「ッ！」

少女の目の前からは男の姿が消え、代わりに無数の弾丸が迫っていた。

「はっ、その速度で反応出来るかい？」

男は少女の頭上を飛び越え、そして背後に回り込む。跳躍中に上段の構えに変えられていた西洋刀は、そのまま振り下ろせばすぐにでも少女を捉えられる位置にあった。

先程まで男を挟撃していた状況が、一転していた。

「チェックメイトだ、魔女サン」

男が掲げた西洋刀を袈裟に振り下ろす。嫌らしく光る刀身が、少女の位置を完全に捉えていた。

男の顔が、笑みに歪んだ。

「……そこまで読んでなかったと思う？」

少女はそれだけ言うと、短剣を西洋刀に直接ぶつける。それでも勢いを殺し切れなかった西洋刀は少女の頭上へと迫るが、その刀身へ弾丸が打ち付けられた。

男の顔には初めて驚愕の色が浮かんだ。無数の弾丸によって勢いを完全に殺された西洋刀は反動で宙に舞い、男の手を離れていった。氷の弾丸など易々と還元することが出来る媒体である西洋刀とはいえ、男が文言を唱えなければ発動などすることは無い。

少女はそれを狙い、極力接近して男が文言を唱える間もなく一撃を浴びせられるタイミングを見計らっていたのだった。不意を突ければ尚好都合。

「ちっ……！」

「クイーンは封じた。あとはキングだけね」

西洋刀はステージのすぐ真下の床に突き刺さっていた。すらりと細長い刀身は月光を反射して淡く輝いている。男は余裕の表情など見せることも無く、すぐさま剣の刺さるステージそばに向かって駆け出した。

しかしそれよりも素早く、少女は短剣で宙を切る。宙に十字が描かれ、それは青白く光り出す。

創造するイメージは、男を捕らえる圧縮空気の鎖。剣の柄に触れられるよりも早く男の動きを封じてしまえば、それで終わり。

——の、はずだった。

パン、とガラスが砕けるような嫌な音が、暗闇の体育館にこだまする。少女は苦い表情を浮かべ、対する男の口には不意に笑みが浮かんだ。

その音は少女の握る短剣の先から発せられた。十字に切られた青白い光はすぐに消え失せ、そして、短剣の刀身は柄だけを残して粉々に砕け散っていた。

少女は小さく舌打ちをする。

逃亡中に黒衣の連中から一本掠め取った短剣だったが、所詮は無いよりはマシといった程度

の媒体であることは少女も判っていた。恐らく最近作られたばかりの、量産タイプであろうその短剣は、抵抗と耐性、伝導率共にあまり高いものではなかった。今の衝撃がとどめとなったのだろう。

「どうやら魔女サンの律動に耐え切れなくなったようだな」

男は床に突き刺さった西洋刀の目の前に立ち、視線だけを少女へ向けた。

「そんなチャチな短剣であれだけの律動を行っていたんだから当然の結果。調律にはちょっと手を焼かされたけど、それもこれまでってワケだな。……そろそろ潮時かい、魔女サン？」

「なめられたものね」

少女は柄だけになった短剣を放り捨てると、自らの指で宙に十字を描く。その軌跡はすぐにも、先程と同じ青白い光を放ち始めた。

少しだけ驚いた顔をしながら、男は突き刺さった剣を引き抜く。文言を叫びながら振り向き様に空を切ると、迫っていた見えない鎖を断ち切った。その勢いのまま少女に向かって駆け出す。距離は、三步。

少女は床板を強く殴りつけ、男との間に壁を作り上げた。しかしそれも見る間もなく霧散して、元の床へと姿を戻す。

「く……」

目の前に男の姿があった。何の役にも立たないと判っているが、少女は咄嗟に後退する。

「さて、八竜神への祈りは済んだかい？」

「……ッ」

「オーケイ、ではこれで終わりにしようか、魔女サン？」

男は今までとは異なる、少し長い文言を口ずさむ。まるで歌うように。

少女の跳躍力は男のそれに及ばず、淡く光を放っている西洋刀の動きから逃れることはまず不可能だった。存在ごと霧散させるのであろうその一太刀は、もはや避けようがなかった。

これまでかと思い、歯を食いしばる。

少女の耳には空気ごと切り裂いて迫る西洋刀の音が聞こえた。

しかし。

——ぼーん。

その刀身が到達するよりも早く、しかしこの場の空気などまるで読む気のないような別の音が、耳に飛び込んできた。

それはステージ上から響く——ピアノの音だった。

0. ノクターン第2番変ホ長調Op.9-2 #8

その時、体育館内で動いているのは青年とピアノと、そしてその音を伝える宵闇だけだった。
普段即興で弾いている楽曲よりも柔らかいタッチ。ゆったりとしていると思ったら突然駆け込むようにもなる。テンポの揺れが激しいその曲は、すぐさま体育館を柔らかいピアノの音で満たしていった。

青年はその細い腕をやさしく踊らせ、すらりとした指で鍵盤をなでる。子守歌のようにも、葬送曲のようにも感じ取れるその楽曲を紡いでいった。

何年も調律されておらず、ほとんどの音がはずれたまま放置されていたはずのそのピアノは、一音たりとも音程を外す事なく柔らかい旋律を奏でていく。青年が紡ぐ音はただ機械的な音ではなく、美しい響きとされる微妙なピッチのずれすら、そのピアノで表現していった。筐体の中に張られている弦に直接触れればそれを表現することは理論上は可能だが、しかし常識的にそれは不可能であり、青年はそんなことをしている様子ではなかった。

譜面台に譜面は置かれていない。青年は記憶を頼りにして独自の色を込めて、その指を踊らせていた。漆黒の筐体はその指遣いに従って、初めて演奏されるであろう変奏曲を歌っていた。

宵闇の中央に据えられた黒い筐体は、まるでその夜想曲（ノクターン）を弾くためだけに存在していたオルゴールであるかのように、美しい和音を奏でていく。

大きく開いた蓋の中に見える弦が、月光が反射しているのか淡く光を放つ。青年が鍵盤を弾くと光の弦も細かく震え、まるで金色の麦畑のようにさえ思えた。何て言うことはない普通のさび付いた弦が、この瞬間だけは自ら光り輝いているように見えた。

なんとなくその弦の輝きをぼんやりと見つめていた。

輝く弦は別に驚くようなことに感じられなく、あちょっと珍しいなというくらいに見ていた。空には当たり前のように浮かんでいる月がある。見つめていたらしばらくして飽きて、それからすぐに視線を外して手元の鍵盤へと落とす。

指はどこかで聞いたり弾いたりしたことのあるような誰かの曲を、普段即興を弾く時のように演奏していた。それはいつ終わるとも知れない楽曲。ピアノにはもちろんのことだが、弾いている自分でも演奏の終わりは判らない。そもそも記憶力にあまり自信がないので、どこまでが即興でどこまで既存曲なのかすら、判らなくなっている。どちらにせよ青年は、普段どちらも同じスタイルで弾いているのでさして問題はないのだが。

思い出したかのようにふと、演奏のテンポを落とす。

「あー」

周囲を見渡して白い猫の姿を探す。するとすぐステージの端に、下へ身を乗り出したままこちらを見つめているエレナが見つけた。少女の元へ駆け寄ろうと思っていた矢先にピアノが鳴り出したものだから、出端をくじかれたのだろう。

エレナは放っておいてもどうこうされることはなさそうだと踏んで、ステージ下方へと視線を移す。演奏の強弱が揺れるテンポに合わせてるように、視線を巡らせた。遠くへ目を凝らせば凝らすほど色が濃くなる宵闇の空間で、淡く差し込む月光だけを頼りに、あの少女の姿を探した。

視線を巡らせると、目立つ銀色の髪がすぐさま目に飛び込んで来た。

「———」

少女はぼかんと口を開けて、ただ突然の出来事に驚いたような顔をしていた。そんな顔を見るのは初めてだったので、なんだか意外だった。というより、面白い。

「あー……っと」

少女のすぐ目の前に立つ黒衣の男の剣は、少女の喉元に触れるか否かというところで止まっている。

「生きてるかー？」

取り敢えず訊いてみる。

「———」

しばらく待つが、返事はない。

わざとらしく溜息をつきながら、

「手遅れ、か……。残念だな、エレナもあんたとようやく再会できたってのになー」

「……ちょっと、勝手に殺さないでよ」

徐々に暗くなって行く曲調は、その少女の言葉で遮られた。

「あ、生きてる」

「あんた今、判ってて言ってたでしょ」

「うん」

青年がふっと笑うと、少女は呆れたようにため息をつく。それから観念したように、小さく笑みを返した。

少しだけ明るくなったピアノの音を背に、少女は一步だけ間合いをとる。意識がないのか、いまだに硬直したままの黒衣の男に向かって、素早く指先を動かしながら小さく異国の言語を発していた。先ほどから二人の間で繰り広げられた怪奇現象を引き起こしていた、あの言語と同じように思えた。

文言によって指先がぼうと青白く光ったかと思うと刹那、生成された目に見えない何物かが男の手から白銀の西洋刀を搦め捕った。ほんの一瞬の出来事だった。

「——ッ！」

突然の衝撃によって気が付いたのか、男は少女の次の一撃が来るよりも速く、二歩三歩と少女との距離をとった。西洋刀を握っていた右手を押さえながら、少女と正面に向かい合う。

気付くと、少女の文言によって全ての時が動き出していた。ピアノの演奏はまだ終わってなかったが、先ほどまで凍ったかのように静止していた空気も、相対する二人も、そしてエレナも流動していく。

向かい合う少女と黒衣の男。男の背に向かって威嚇している小さな白い猫。そして壇上からは流れるようなピアノの音色が、バックグラウンドミュージックとして奏でられていた。

「……ハ、アハハハハハ。これは一本取られたね」

男は押さえていた手を離し、その長身をすらりと伸ばして直立した。正面には少女が西洋刀を構えているにも関わらず怯むような様子はなく、乾いた笑いで体育館を満たした。

「魔女サンがここに帰ってきたのはそういうワケだったのか。アンタも人が悪い、こんなところに切り札（ジョーカー）を仕込んでおくとは思いませんでしたよ」

「勝てば官軍でしょ」

「ハハ、違いない。それにこれはイカサマでも何でも無い、オレの落ち度だ。素直に負けを認めようじゃないか」

男はひらひらと手を振る。しかしエレナは身構えたまま、少女もまだ西洋刀の切っ先を下ろすことはなかった。

すると何かを思い出したのか、男はくつつつと笑い出した。

「何が可笑しいのよ」

「いやいや、これを笑わずには居られないだろう。魔女サン、アンタは以前こう言ったよな、

『あいつは、私とは何も関係ない一般人』と」

「……」

「それが蓋を開けてみればどうだ、その一般人は既にこちら側の人間じゃないか。そのまま何も関与せずにはいれば良いものを、アンタはその手で今、何も関係ない一般人とは呼べない場所に引きずり込んだじゃないか。ククク……これが笑わずにはいられるかい？」

暗い体育館の中では少女の表情は良く見えない。しかし、あまり穏やかではない空気を纏っているということは青年にも推し量れた。

「魔女サン、アンタは結局この世界においては害毒でしかないのサ。こうしてまた一人、こちら側に引き込んだんだからな」

「それで？ だから私もあんたたちに協力しろって言うわけ？」

少女は切っ先を男に向けたまま、一步だけ距離を縮める。

「あんたたち——調律師たちは律を脅かす存在を抹消し、そして律のありのままの流れを体現しようとしている。言いたいことは判るけど、けどあんたたちが実際やっていることは違う。ただの殺戮と破壊じゃない。淘汰なんて言葉を使っても、それは言い逃れの出来ない事実でしょ」

もう一步近づく。

「そんなあんたたちに、石は渡せないわよ」

西洋刀の切っ先が男に触れるか触れないかという位置にまで、少女は距離を詰めていた。

「悪いけど、オレにそういう難しい話は判らないな」

男は無感情に肩を竦めるふりだけした。

「ただ上に言われたことに従っている駒だよ、オレは。駒はあんまし考えたりしないってワケ。オレがやんなきゃいけないことはアンタを連れて帰るか、協力を拒まれたら抹消しろってことだけだ」

「あんたは……それでいいの？」

ぼそりと呟いた少女の言葉に、男は口元を緩めた。

「ハハハッ。——まさか同情でもしてるのかい、魔女サン？ さっきまで自分の喉元に剣を突きつけていた敵に同情とは、随分な余裕を見せてくれるじゃないか」

「別にあんたがどうなろうと知ったことじゃないわよ。たださっきからあんたの言い分に腹が立つだけ。駒だ駒だ言って、そう言っていれば何もかもが許されると思ってるようにしか聞こえないわ」

「ハッ、それは心外だね。別にそんなモノじゃないさ。オレがそうしたいからそうしてる、ただそれだけ。魔女サンにそんな言葉を吐かれるほど、オレはオレを見失ってなんかいない。アンタとオレは生まれが違えば歩んできた道も生き方も違う。それだけの話だよ。相容れないってことさ」

少女はその言葉には何も返さず、ただ視線を男に向けたまま無言で居た。

ふと、男はこちらを見やる。ピアノの奏でる音を数秒聞き入った後、感心したように、

「へえ……これはまた相当な使い手じゃないか。まさかこれほどの人間が、普通の生活に溶け込んでいたとはね。お前、そのピアノは何処で習ったんだい？」

青年はきょろきょろと周囲を見回したあと、男へ視線を返す。

「ん、俺？」

「お前だ、お前」

「母に習った。習ったってゆーか、無理矢理習わされた。まあすることもなかったから遊び道具代わりだったって感じ」

「どのくらいやったんだ？」

「物心付いた時からこっちに出てくるまでずっと。ざっと十年はやったと思うけど」

そう答えると、男は自分で訊いておきながら別段興味も無さそうな顔をして視線を少女へと戻した。それはちょっとひどいんじゃないか。それはそれとして見ず知らずの男に何故こんなことを聞かれたのか判らなかったがまあ減るものでもないしいかと割り切り、取り敢えず演奏を続けることにした。今の青年はどうやらバックグラウンドミュージック担当のようだったので。

「いやはや、面白いものを見せて貰ったよ。アンタといいあのピアニスト君といい、ね」

少女が切っ先を向けているにも関わらず、男は平然とした様子でフードを目深に被り直す。

「逃げるつもり？」

「今日のところはこの辺でいいだろうと思ってね。これ以上居ても、オレに勝ち目はなさそう。言っただろう、素直に負けを認めるってね」

「そう」

少女は短くそれだけ言うと、西洋刀を放り捨てた。そうして男の脇を通り抜け、エレナを抱きかかえる。

「あんたが帰ったら伝えて。あんたたちに協力はしないし石も渡さない、ってね」

「オーケー。悠（はるか）に伝えておこう」

男もゆっくりと西洋刀を拾い上げて鞘に収めると、開け放たれたままの体育館の出口へ歩を進めた。黒衣の男と少女は背を向けあったまま、互いに視線を合わせるようなことはしなかった。

「……おっとそうだ、ピアニスト君」

体育館の外へ一歩踏み出したところで男は立ち止まった。突然話を振られるとは思ってもしなかったのだから、演奏が一瞬だけもたると。

「そこの魔女サンをあまり信用しすぎない方が良く」

「は？」

「魔女は魔女ってことさ。……ショパンのノクターン、良かったよ。またな」

言うだけ言って、男は宵闇の中へ疾駆していった。外套の色と闇の色が溶け込み、すぐに見えなくなってしまった。

言われた意味を推し量りかねてしばらく考えていたが、やおら面倒臭くなったのですぐに考えるのをやめた。

ピアノの演奏は再び出だしへとループし、最後のメロディを奏で始める。普段よりは短い三十分程度の演奏だったが、今日はなんだか色々あったのでこの辺で切り上げてもいいかと思う。明日が月曜日だということも考慮して。

視界の端に影が見えたかと思ふと視線を移すと、そこには銀色の髪を纏った少女がステージ上に立っていた。

「お疲れさーん」

そう投げやりに言ってやると、少女は呆れたように溜息を吐いた。

「……あんたの辞書に緊張感っていう文字はないわけ？」

「数年前にそのページは破り捨てた」

「それ、謹直とか銀杏とかも一緒に消えてると思うんだけど」

「あー謹直っていうのは要らないけど銀杏は欲しいな、ちょうど小腹も空いてきたし」

「そういう問題じゃ……って、聞いた私がバカだったわね」

そんなやりとりをしているうちに、演奏は最後の音を伸ばして終演を迎えていた。音を長く響かせておくダンパーを踏む足の力を弱めると、体育館内は瞬時に無音の空気に凍り付いていった。

少女はエレナを下ろすと、ピアノの黒い筐体に背中を預ける。これから蓋閉めるから邪魔なんだけどと言おうと思ったが流石にそれは憚られたので、取り敢えず椅子に座ったまま伸びをする。

「あーそうだ」

青年は思い出したようにそう呟いた。

「おかえり」

少女はきょとんとして、こちらを見る。どうせまた溜め息でも吐いてこの状況で呑気な奴ねあんたとか言うのだらうと思っていたら、予想に違わず呆れたようにまた溜息を吐いて、しかしそれから少しだけ嬉しそうな顔をしながら、

「ただいま」

とだけ言った。

青年は初めて、彼女の気持ちよさそうな笑顔を見た気がした。

0. ノクターン第2番変ホ長調Op.9-2 #9

深夜はもう二時を回っていた。

別段、それほど長い時間戦っていたという訳ではなかったが、疲労は確実に溜まっている。敵地の倉庫から奪ってきた短剣が折れ、石の力を命を借りながらも危うく落とすところだったのだから当然と言えば当然だった。

いくら本領発揮出来なかったとは言え、まさかそこまで追いつめられるとは正直思っても居なかった。今まで何人もの連中と戦ってきたが、今宵の相手は今までの連中とは比べものにならないほど律動に長けていた。身のこなしも良く精練されており、あの西洋刀の扱いも巧みで、正直本気でなければ勝つことは出来なかったように思えた。

しかし、そこで命を助けられた。それも意外な人物に。

少女の隣にはその意外な人物であるところの、休日にも関わらず制服を着て学校の体育館に潜入した青年が居る。体育館を出てからしばらく一緒に道を歩いているが、のんびりと夜空を見上げながら眠たそうに歩いている。時々エレナにちょっかいを出そうとしては逃げられていたりしていた。

普通に見れば何の変哲もない——とはちょっと言いづらいが一応は一般的な高校生。しかし、少女にはただそれだけの人間には到底思えなかった。

「今日のは良かったわよ」

不意に、青年に向かってそう言い放つ。

「何点？」

「九十点は固いわね」

「そっか、じゃー記録更新だな。今までの最高が八十三だから、随分上がったな、うん」

言葉の割にそこまで喜んでいる様子はなかった。かと言って別に落胆している訳ではなく、これが彼の素のようだった。

「あんた、さっきのああいう演奏って意図的に出来るわけ？」

「んー？」

真夜中の体育館での戦闘。驚かされたのはあの黒衣の刺客だけではなく、むしろこの青年の方にこそだった。

青年が弾いたピアノの演奏——戦闘の真っ最中だった黒衣の男と少女の二人の動きを完全に停止させ、短い時間だったが意識すらも奪った。そして楽曲に含まれる何らかのエネルギーの作用で黒衣の男を退かせるまでに至らせた——それは、少女が戦闘中に行ったものとは全く毛色が異なるとはいえ、紛れも無く「律動」だった。

律動とは世界の法則でもある「律」の流れに沿いながらもそれを書き換えて、通常では考えられない現象を引き起こすことの出来る技術である。川の流れを少し遮って波に変化を起こさせるように、一定の法則に従って律に変換命令を下せば、何もない空気中に火を起こす程度のことは容易い。高度な使い手ともなれば天変地異を具現化することも可能とする——それが、律動。これを行うにはそれなりの手ほどきを受け、相応の訓練をする必要がある。

しかし、「この世界」においては異なる。律動を行使できる者はごく限られており、そもそも世間一般にはその存在すら知られていない。この世界における律動は魔法だとか超常現象だとか呼ばれており、誰も彼も一種の伝承や夢物語、怪談程度にしか捉えていない。

そこに起きた現象を、科学という仮想概念のみだけで無理矢理曲解する——これが、少女の見てきたこの世界の「常識」だった。

そんな世界において律動を意図的に行使するというのは、少女にとってにわかに信じがたかった。この世界の常識を越えた現象——律動。それを行使した。それもこんなただの高校生が、だ。

「あー、演奏を聴くと思わずこっちに気を取られちゃうとか席を立てて帰りたくなるとかそういう演奏の仕方って意味なら、まあいつでも出来るかな」

「どういう演奏よ、それ……」

「あんたたち二人は無音で戦ってただろ。そこに唐突に曲が流れれば、こっちに気を取られる。それから有名な曲に敢えて嫌な響きの不協和音を混ぜつつ、でもつい耳が行っちゃうようなメロディを演奏して……あとはその応用応用って感じで」

「さっきの、まさかそんなのでやってみせたの？」

「ん、まあ」

青年の言ってることは判らないでもない。しかしそれは、ただ純粹に音楽の持つエネルギーみたいなものだ。世界を書き換えるほどの意識的操作をしているわけではなく、別に難しいこ

とをしているわけでもない。決して律動とはほど遠い、感覚的な話のように思われた。
「あんたみたいに氷を飛ばしたり床板を腕にしたりっていうわけわかんないのはともかく、ああいう律動なら簡単に出来るって」

「簡単に出来るって、そんな風に——」

そこで青年の言葉の中に何気なく表れた単語を、少女は聞き逃さなかった。

「あんた、律動って何だか判ってるの？」

「まあ、人並み以上には？」

なんで疑問形なのかと訊ねようと思ったが、そんなことよりもこんな高校生が律動という言葉で平然と使うことに、少女は再び驚かされた。存在が知られてもいない律動の名を知っているということに。

少女が驚いていると青年はうーんと唸りながら立ち止まり、足下に転がっていた小石を拾い上げる。それをすぐ脇の塀の上へと置いて、数歩距離を取った。

「律動って、こーいうのだろ」

何をする気なのか少女が訊くよりも早く、青年は指をパチンと鳴らした。

——その音が鳴るや否や、塀の上に置かれた小石はざあっと粉々に砕け散った。

「——ッ?!」

宵闇の中では何が起こったか判りづらかったが、目の前の塀には粉々に砕かれた小石が確かにある。

自然に割れたのではない。たった今、青年のスナップによって砕かれたのだ。

青年が今行ったのは、確かに律動だった。

「あんたそれ、どこで教わったの」

「ん、気付いたら出来るようになってたけど」

目の前の律動は信じられても、流石にそれは信じられない。

「あんた、それ本気で言ってるの? 律動ってそうほいほいと使えるようになるようなものじゃないのよ。普通は何年も勉強して練習して、それから少しずつ実践をこなして使えるようになるの。それを気付いたら出来るようになってただなんて、そんな馬鹿な話があるわけないじゃない!」

「いや、そう凄まれても本当だしな……」

「それにインストゥルメント・デバイスもなしに律動を行うだなんて。石持ちの人間でもない出来ないはずなのに……」

青年は不思議そうな目で少女を見る。

「? いんす……何?」

「インストゥルメント・デバイス。共鳴律動装置といって、私が使ってた短剣とかあの男が持ってた剣なんかのことよ。大抵刃物か何かの形状をしてるんだけど、普通はこのデバイスっていうものがないと律動は起こせないものなの。聞いたことない?」

「よくわかんないけど、見たことも聞いたこともない」

眠そうな顔をしたこの青年はごく自然に受け答えをしているが、事実とは信じ難いことが多い。ただの一般人が修練もなしに律動を意図的に操れるということに加え、インストゥルメント・デバイスを知らないとまで言う。はいそうですかとはい、流石に受け入れ難い。ここで嘘をつく理由は察せられなかったが。

少女はこちらの世界に来てから今まで、何人もの律動の使い手を見てきた。しかし石持ちの人間ならばともかく、インストゥルメント・デバイスなしに律動を行使した者は他に誰一人として居なかった。

仮にあの体育館のピアノがそうなのだとすれば、少女を助け男を退けたのは説明が付く。しかしそうだととしても、たった今日の前で小石を砕いてみせた律動の説明はつかない。起爆剤とも言えるインストゥルメント・デバイスもなく律動を行使できるというのは、例えるなら何も使わずに無風の水面に波を起こせるようなもの。そんな反則技を目の当たりにしたとはいえ、少女も容易には信じる事が出来ないのは当然のことだった。

その他に、この反則技を可能にする要因として考えられるのは——、

「あのさー」

「何?」

呼ばれて気付くと、青年は既に随分と先の方を歩いていた。エレナはというと少女の足下につかず離れずで座り込んでいる。

「俺、明日学校あるからさー。先に帰って寝てもいい?」

向こうの方に手をひらひらと振っている無神経で無頓着な高校生が見える。

「あのね……私は話の途中なんだけど」

「俺は早く寝たい。眠くて死ぬ」

「そのくらいで死にやしないわよ。ていうかあんた、女の子一人置いて先に帰るとかよく平然と出来るわね」

「だって俺が居なくてもあんた平気そうだし。それに俺が居たところで何も出来ないじゃん」

「こういうのはそういう問題じゃない……ってああもう、そうじゃなくてっ」

完全にあの青年のペースにはめられている。落ち着け、私。

何の変哲もないただの高校生が、インストルメント・デバイスもなしに律動を行使する。そして連中の仲間ではなく、また別の組織に属している様子もない——これだけの素質を持ちながらも完全にフリーというこの状況を、あの連中が見過ごさずはない。

少女はずかずかと青年の側へ歩み寄る。

「あんた、さっきの連中——調律師たちに狙われるわよ」

「んー？」

「真面目に聞いて。あんたがどうして律動を知っていたり行使できたりするのは知らない。けれど、これだけは確かよ。あんたは連中から見たら喉から手が出るほど欲しい、特異な逸材なの」

連中は律を乱す存在を抹消する。しかし律を乱す者というのは大抵、それ相応の能力を持っていることが多い。すなわち、律動を扱える者が多いということ。その存在を抹消するくらいなら、自分たちの駒として引き込んだほうが役に立つ。あの調律師と名乗る者たちは、今もそうやって勢力を伸ばし続けている。

連中にとって人間というのは三種類しか居ない。何も知らずに平和に暮らしている一般人か、自分たちに有益な仲間か、もしくは障害となる敵かだ。

「連中に目を付けられた者は弱みに付け込まれて屈服させられるか、もしくはそれを拒んで抹消される——あんたはその対象になりうるの。さっきの演奏は、連中にその能力を見せつけるには十分すぎる律動だったのよ」

「……」

黒衣の男が放った言葉と表情は、まさに極上の獲物を見つけた時のそれ。あの素振りからも、この青年が連中の標的とみなされたのは察して余りあることだった。

「これからあんたは昼夜、連中に見張られ続ける。連中はどんな姑息な手を使ってでもあんたを引き込もうとするし、そしてそれを断れば命を狙われることになる……私のようにね」

少女がそう言い終えると、青年はぼんやりと少女の方を見たまま固まっていた。

いきなりこんなことを言って理解しろというのは無理がある。しかし命を狙われるようなことになりうるのだから、そういった事実は知らせておくべきだろう。

青年は硬直したまま、ずっと黙り込んでいた。少女の言葉を反芻しているのだろうと思っていると、

「……んがっ？」

「ああもうっ、話の途中で立ったまま寝てんじゃないわよ！」

「いやだって話長いし眠いし……ふわあー」

今夜すぐに連中が接触してくるとは考えにくいだが、しかし香気にあくびなどしている場合でもないのだ。この青年の緊張感のなさには、流石に眉をしかめるしかなかった。

「はあ……ホント、どこまでもしょうがない奴ねあんたって……。巻き込んだから心配してるこっちが馬鹿馬鹿しくなってくるわよ、もう」

「はへ？」

その抜けた反応に盛大に溜め息をついてから、少女は青年の正面に立つ。

秘めた能力をひけらかすことなく普通の生活を送っているが、その実は自分自身にとてつもなく無頓着で関心なんかこれっぽっちも持たず、他人のことも割とどうでも良さそうな目で見ている本当にどうしようもない奴。どこかの誰かさんとはまるで正反対の性格。

「あんたと一緒に行動して、当分は連中から守ってあげる」

「……はい？」

「二度も言わせないで。責任を取ってあげるって意味よ」

凄まじい資質を持っているとはいえ、所詮はまだ会ってから間もない赤の他人。互いに名前も知らない仲。責任だの何だのというものは放っておいて、本当はこんな人間は無視して先を急げば良いというのは、少女も十分に判っていた。

「私の問題に勝手に巻き込んで、あんたの存在を連中に知られることになった原因を作ったのは私なんだから、その責任くらいは取ってあげるわよ。私のせいで死なれたとなったら、私自

身後味が悪いし」

正直に言えば、この青年に少しだけ興味が湧いた。かの能力と、異端の存在である少女を自然を受け入れた能天気さといい、どうにもつかみにくい性格のこの青年と、もう少しだけ行動を共にしてもいいと思った。

この青年がどこまで律動や連中について知っているかも聞き出すことができれば、今後の活動に役立つかもしれない。あるいは、いざとなれば青年の能力を利用して連中を退けることもできるだろう。そういった意味でも、行動を共にするのは悪くないだろうと思う。

青年は少しだけ困ったような顔をして、うーんと唸る。

「責任とかどうでもいいんだけど……それって結局のところ、具体的にはどうなるわけ？ 一日二十四時間ずっと一緒に居るとか？」

「いつ連中が姿を現すとも限らないからできればそうしたいところだけど。でもあんたにも生活ってものがあるでしょ。だから私だってそこまで踏み込む気は」

「俺一人暮らしだから、別にうちに泊まってくれてもいいけど？」

少女が言い終わるより先に、青年は別段顔色を変える事なくそう言い放った。まるで明日の朝ごはんはパンにしようかと提案するようなそぶりだ。

「……は？」

「なんか無駄に広い部屋だから一人くらい増えたところでどうってことないし、別に光熱費とかも問題ないし——あ、一人と一匹か。でもまーこれまでもエレナが増えたっていても問題なかったし、大丈夫だよ」

具体的に何がどう大丈夫なのか判らない。それってつまるどころ、

「——って、あんたそれ正気？」

「だってそのほうが楽じゃん、俺もあんたも。……あーでも、あんたにも家があるだろうからそういうわけにはいかないか」

「まだない、けど」

「じゃあそれでいいじゃん？ だめ？」

少女の提案をより最善の方法で実行するには、確かにそれが一番効率がいい。未だに拠点を決めずに転々としていた少女にとって、それなりの律動を操れる人間の元に身を寄せることができるというのは願ってもいない提案ではあった。

しかし、やっぱりその意味するところを考えると素直に受け入れるのは気が引けるわけだ。

この青年は本当にどこまでも、何を考えているのか判らない。……たぶん何も考えてないのだろうけど。

「なんか、不満？」

——強いて言えばこの状況と、あんたの能天気さに。

少女は観念したように、盛大に溜息を吐く。

「……はあ、判ったわよ。そこまで言うなら、お言葉に甘えさせていただくわよ」

「ん。じゃあ決まりだな」

ずっと眠そうな顔をしていた青年はうっすらと笑みを浮かべて笑う。少女は青年に上手く乗せられているような気がして、なんだかすっきりとしなかった。

「ただし。私は食事にはうるさいわよ」

「……う」

仕返し代わりに言ってみると、予想通りのわかりやすい反応。少しだけ視線が泳いだ。

「ごめん俺あんま料理上手くない。卵焼きとスパゲッティが限界ってとこだ」

「まあ、そんなことだろうとは思ってたけど」

男の一人暮らしに料理は期待してない。もちろん一人暮らしともなれば料理のスキルが上がることもままあるが、この青年に限ってそれはないだろうと断言出来た。そもそも、この青年が台所でエプロンつけてせっせと料理している姿を、少女は到底想像出来なかった。かといってジャンクフードを漁ってるという印象もなかったが。

「それじゃあこうしない？ 私は宿を借りる代わりに、食事を担当する。私はそれなりに料理に自信があるから、ご期待に添うと思うわよ」

少女自身も一人で生活していた期間は長い。加えてそれなりにグルメな味覚のお陰で、少女の料理スキルが上がっていくのは必然と言えた。

「あんたが？ いいのか？」

「私だってただでずっと居座るのは嫌だから、これくらいさせてちょうだい」

ついでにピアノ演奏のお礼も兼ねているのだがそれは言わなくてもいいと思ったので、やめた。

「んまあ、あんたがそうしたいっていうなら、それで」

青年はそう言ってあっさりを受け入れた。別段毒を盛ったりする訳ではなかったが、そこまであっさり言われると逆に少し興奮めでもあった。

エレナが足元で小さくあくびをする。もうそんな時間だったか。

「あんまり、嬉しく無さそうね」

「すっげー嬉しいよ。最近ほんと食事作るの面倒に思ってたし。いやほんと助かる」

「そう。そう言ってもらえるなら、こっちとしても作り甲斐があるわ」

他の人間のために料理をするのはいつぶりだったか、もう思い出せないが。

エレナのがうつったのか青年もひとつ大きなあくびをする。たっぷり五秒ほどかけてから「んじゃ帰るかー」と視線だけで言ってそぞろに歩きだす。宵闇の中、漆黒の学生服に身を包んだ青年の背中を見ながら、少女もそれに続いて歩きだした。エレナも相変わらずつかず離れずで、とことこと付いてきた。

月ももう傾いていた。通学路の割には街灯の少ない道を二人と一匹は無言で歩く。

これからしばらくこの青年の家に居着くと考えると訊こうと思っていたことも割とどうでもよくなり、エレナや青年のものがうつったのか、少女も小さくあくびをした。その様子をエレナが見ていたような気がするが、目を合わせるとすぐにそっぽを向いてしまったので判らなかった。

「あー、嬉しいっていうのは食事のことだけじゃなくて」

少し歩いた後、青年が突然そう口火を切った。少女はいきなり言われて一体何の話なのか理解するまでに五秒ほどかかった。

「俺はまたあんたにピアノ聞いて貰えるのも、嬉しいかな」

「……」

突然、何を言い出すかと思えば。

そう何気ない口調で言った青年は口に手を当てて再び大きなあくびをしていた。今自分が何を言ったのか、そもそも自分が今言葉を発したということすらきちんと理解しているか怪しい。今なら立ちながらでも寝てしまいそうな青年を見て、少女は再認識する。

「やっぱり、変な奴」

夏の終わり、異端の夜想曲と共にその邂逅はなされた。

——「ノクターン第2番変ホ長調Op.9-2」終